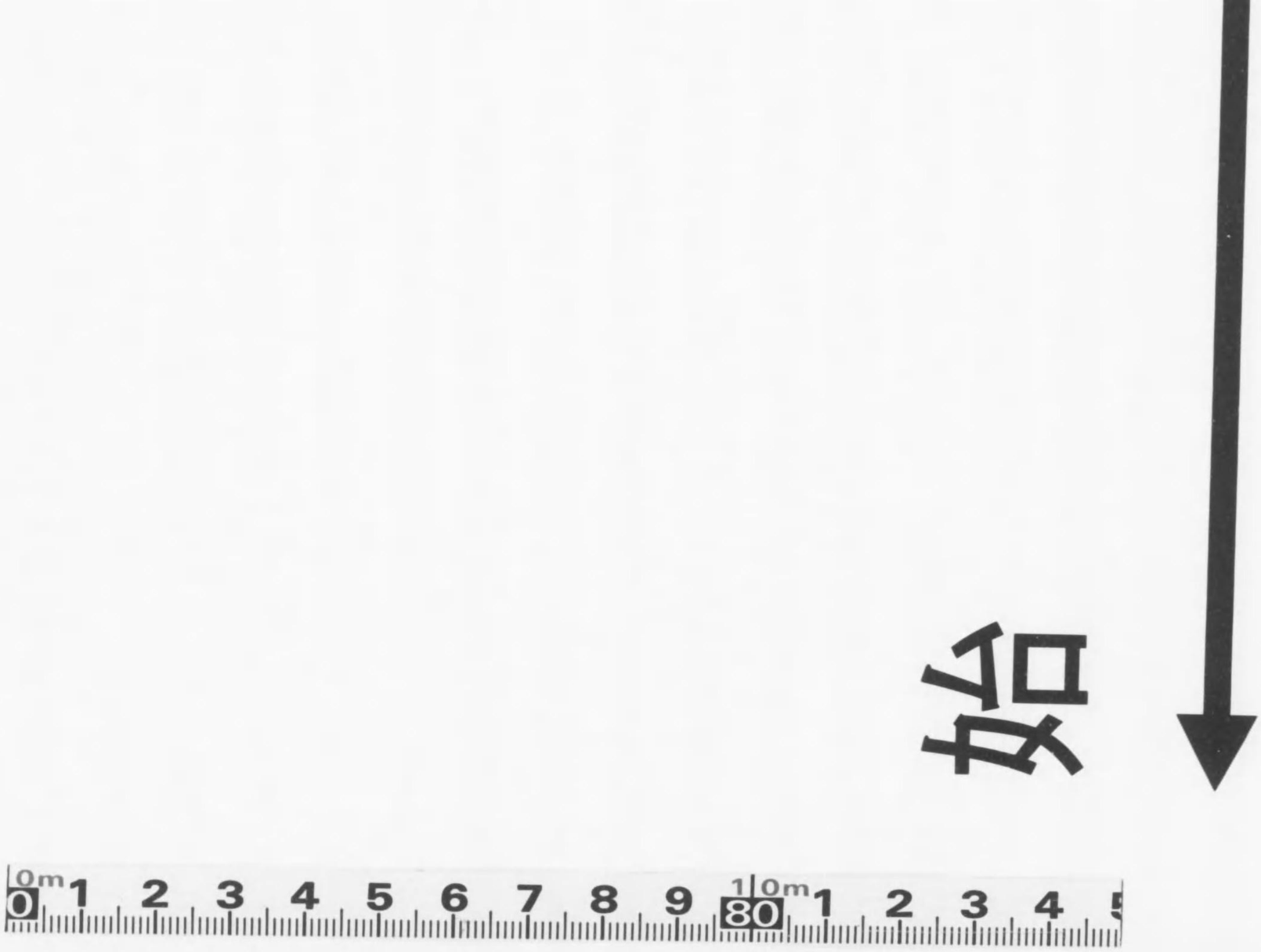
357
329
357-329
12005014111186

25. 2. 27

39

論

357-329

內容目次

一、文學に關する讀書について……小泉八雲　一
二、讀書及書籍……ケーベル　三七
三、胡麻……ラスキン　八三

文學に關する讀書について

一、文學に關する讀書について

小泉八雲

書籍や典據を離れて文學的生活及び著作に關する連續的の講義をして、できるだけ違つた國々に於ける文學の製作者の間の、實際上の經驗の結果を示す事に關する、私の約束を果したい。題は讀書である。見たところ或は甚だ簡單な題目だが、實はそれ程簡單でない、諸君の考へられるよりも、もつと遙かに重大である。私は讀書を心得て居る人は極めて僅少であると云つてこの講義を始める。趣味と判斷が得られるまでには、文學に關する澤山の經驗が必要である、そしてそれがなければ、讀書法を會得する事は殆んど不可能である。私は殆んど不可能と云ふ、その理由は、元來生得の趣味を以て、遺傳の文學的本能によつ

て、二十五歳にも達しないうちに非常によく讀む事の出來る珍らしい人が時にあるからである。しかしこれは例外である、それで私は普通の人に話す。

書物の文字、文句を讀む事は本當の意味の讀書にはならない。機械的に言葉や文字を讀んでゐて、甚だしきは全く正しく音讀しながら、心は全く違つた題目に奪はれて居る事のあるのに諸君はよく氣がつくであらう。この單に機械的な讀書は、若い時に全く無意識的になる、そして注意力と無關係に行はれ得る。それから自分の興味のために、言ひ換へれば「話のため」にのみ本を讀む事、卽ち書物からその話の部分だけを引き拔く事を讀書と云ふ事はできない。しかし世界でなされる讀書の大部分は正しくこんな風に行はれるのである。幾千また幾千と云ふ書物は毎年、毎月、いや毎日とも云はれやう、少しも讀書しない人々に買はれる。その人々はただ讀んだつもりで居る。彼等は面白いために、彼等の所謂「時間つぶし」に書物を買ふ、一二時間のうちに、彼等の眼はページをすつと通つて、彼等の頭に、見てゐた事に關する一二のぼんやりした考が殘る、これを彼等は讀書と信じて

居る。「君は何々の書物を讀んだ事があるか」と問はれる事や「私は何々の書物を讀んだ事がある」と云ふ事程ありふれた事はない。しかし是等の人々は眞面目に云つて居るのではない。「私はこれを讀んだ」或は「私はあれを讀んだ」と云ふ千人のうちで、その讀んだ物について、聽くだけの直打のある說を吐く事のできる人は恐らく一人もあるまい。

度々私は學生が或書物を讀んだと云ふのを聞く、しかし若し私がその書物について何か質問をしたら彼等は何の答もできない、或は精々の處で、彼等が讀んだつもりで居る物について誰か外の人が云つた事をくりかへすだけである事を見出す。しかしこれは學生にのみ限つたわけではない、凡ての國に於て大多數の人々が書物を丸呑みにする方法である。それでこの講義の總論的部分を結ぶために、私は大批評家と普通の人との區別は重に、大批評家は讀書法を知つて、普通の人は知らないと云ふ事を云ひたい。或書籍の內容に關して創造的意見を發表する事のできない人は、實は書物を讀む事のできない人である。

疑もなく諸君はこれは讀書と研究を混合して居ると考へるだらう。「私共が歴史や哲學や科學を讀む場合には、それこそ甚だ丁寧に、本文の意味なり關係なりを充分に研究して徐ろに、考へながら讀む。これは勉强です。しかし教室の時間以外に小説や詩を讀む場合はそれは娯樂のために讀むのです。娯樂と研究は全く違つた物です」と諸君は云ふだらう。諸君は皆かう考へるかどうか知らないが、青年は大概そんな風に考へる。事實は、讀む價値のある書物なら、丁度科學の書物が讀まれると同じ方法で——單に娯樂のためでなく——讀まるべき物である、それから讀む價値のある書物は、悉く科學の書物にあると同じ分量の價値があるわけである、ただその價値は全然違つた種類の物かも知れないが。そのわけは要するに、小説傳奇詩歌のよい書物は科學的著述である、それはいくつかの科學の最高の原理、殊に人間の性質の知識と云ふ、人生の大きな科學の原理に隨つて作られた物であるから。

外國の書籍に關しては、これは殊に本當である、しかし私共自身の國語でないもので讀

む場合には、與へられた助言に隨ふ事は一層困難であらう。しかし、どれ程の英人は英語のよい書物を實際讀むと諸君は想像するだらうか。どれ程の佛人が佛語のよい書物を讀むだらうか。多分讀んで居るつもりの二千人のうち一人より多くはなからう。さらに、今日ロンドンで毎年六千冊以上の書物が出版されるが、今日程一般公衆がぞんざいな讀方をした事はなかつた。書物は一種の流行のやうに、——むしろ或流行に隨つて書かれる、賣られる、讀まれる。外の物にも流行がある通り、文學にも流行がある、それで公衆が特殊の娯樂を要求すると、その要求に應ずるために特殊の讀書が與へられる。この公衆には眞の文學にある藝術も優美も、大傑作にあるべき大思想も全く無用になつたので、學者は本當の文學を作り出す事は殆んどなくなつた。文體も美もない書物、ただ面白い話を書いて大きな金儲けができる、同時に、實際よい書物を製作するのに、三年五年十年もかかつてゐては或は餓死すると云ふ事が分つて居る以上、彼の天職の高い方の義務に不忠實になるのは止むを得ないだらう。金錢の事に關して幸福な地位に置かれて居る人々は、時々何か

偉大な物を或は企てる事もできよう、しかし耳を傾けてくれる人は誰もないかも知れない。最近數年の間に趣味は非常に墮落したので、私が以前に云つたやうに、文體は事實消滅した　そして文體は思考（シンキング）である。そして英國に於けるこの事情は惡い習慣の讀書——讀書法を知らない事から重に起る。

學者が心にかけて置くべき事の第一は、書物は單に娯樂として讀むべき物でないと云ふ事である、餘り敎育のない人は娯樂のために讀書しても、それに對して非難さるべきでない、その人々は實際の大文學にある深い方の性質を評價する事はできない。しかし大學敎育を受けた青年は、單に娯樂のために讀書しないやうに、早くから自分で訓練しなければならない。一たびその訓練の習慣ができると、單に娯樂のために讀書する事ができなくなつて來る。さうなると、智力の糧を得る事のできない書物、高尙な情緒とその人の智力に何等訴へる事のない書物は、たまりかねて投げ出すであらう。これに反して、娯樂のために讀書する習慣は、數千の人々にとつて酒を飲む事、阿片を吸ふ事の習慣と全く同じ種類

の習慣になる、それは一種の催眠劑、時間を空費させる物、永久の夢の狀態を續けさせる物、結局思想の能力を凡て破壞して、心の表面の部分をのみ活動させて、感情の深い泉や知覺の高尙な能力を使用せずに置くと云ふ結果になるやうな物である。

私共は單にこの種類の讀書について如何なる事實があるかを述べて見よう。例へば一人の事務家が毎日事務所へ通勤の往復の途中、時間潰しに本を讀む、何を讀むのであらう。勿論、小說、非常に樂な讀み物だから暫らく彼の苦痛を忘れさせる、毎日のおきまりの小さい色々の苦勞に對して彼の心を鈍くさせる。一兩日でその小說を讀み了る、それから別のを取る。この節は讀む事は早い。一年經つたら、彼は百五十冊から二百冊までの小說を讀んでゐた、どんなに貧しくてもこの贅澤は彼にはできる、巡回文庫の制度があるから。數年の後には彼は何千と云ふ小說を讀んだ事になる。彼は其の小說を好むのであらうか。否、彼は諸君に、その小說は皆殆んど皆同じやうであるが、ひま潰しにはなる、今では必要物となつて居るから、もし此の種類の讀書を續けないと苦だつまらなくなると云ふで

あらう。その結果は能力をしびれさせる事にしかならない。「彼は其の數千冊のうち二三十冊の名も覺へてゐない、まして內容など覺えて居るわけはない。この讀書の結果はたゞ精神が朦朧となる事をしか意味しない。それが直接の結果である、間接の結果は精神の發達が妨げられる事である。凡ての發達は當然多少の苦痛を意味する、そして私が云ふやうな讀書は無意識にその苦痛を避ける手段として使用される、それでその結果は萎縮である」。

勿論これは極端な例である、しかし娛樂のために讀書をして、それが習慣となつて、その習慣に耽る方法が手近にあると云ふ場合は、これは究極の結果である。現在日本にはこんな種類の危險は殆んどない、しかし倫理上の警告として私はこんな例證をあげる。

「これはよい文學の種類にも避くべき物があると云ふ意味ではない。よい小說は最大の哲學者でも實際讀みたいと思ふ程によい讀物である。要するに讀まれる物の性質よりもさらに、讀方が大事である。よくこれまで云はれたやうに、どんな書物でも何かよいところがそのうちにあると云ふのは極端かも知れない、ただかう云ふ方がもつとよからう、即ち、

書物からよい影響を受けるのは、その著者がどんなにゐらくとも、著者の藝術によるよりは、讀者の習慣にある方遙かに方い。

以前の講義に於て、私は子供の觀察法は大人の觀察法よりもすぐれて居る事に、諸君の注意を促さうとした、同じ事實が子供の讀書法についても注意される。たしかに子供はただ極めて簡單な物をしか讀めない、しかし子供は極めて完全に讀む、それから讀む物について倦く事もなく、くりかへしくりかへし考へる、一つの小さいお伽噺は、讀んでから一月の間も彼の心を占有する。彼の小さい想像の氣力は悉くその物語の上に消費される、それでもし賢明な兩親なら、第一の物語の面白さ、及びその想像上の結果が消へ始めないうちは第二の物語を讀む事は許さない。それから後の習慣、私が敢て惡いと云ふ習慣はすぐに子供の本當に注意深い讀書力を破壞してしまう。今度は職業的讀者、科學的讀者の場合を考へて見よう、そこで私共は同じ力が、勿論非常に發達して居る事に氣がつくであらう。私がいつも訪問した大きな出版書肆では、毎年一萬六千の原稿が集まつて來た。この原稿

は皆一通り見て判斷を下さねばならない、ところでそんな仕事をする人は所謂職業的讀者（プロフェッショナル）である。この職業的讀者は學者で、又異常の才能の人でなければならない。一千の原稿のうち、恐らく彼は一つ以上は讀まないだらう、二千のうち事によれば三つ讀むだらう。その外は彼はただ數秒だけしか見ない——その原稿は讀む價値があるかどうかを定めるのは一瞥で足りる。ただ一節の文章の形からも、文學上の見地からそれが分る。名前だけでも、澤山の場合には、內容を判斷するのに充分である。或原稿は彼の注意を一分或は五分惹く、極めて少數の物だけ、もつと長く考慮される。一萬六千のうち、十六だけが最後の判斷を受けるために選ばれる。それだけは初めから終りまで讀む。讀んでから八つだけはさらに考へる事にきめる。その八つを再び、もつとすつと丁寧に讀む。第二回の試驗の終りにその數は多分七つになる。この七つは第三回目の檢査を受ける事になる、しかしこの專門家はよく物が分つて居るから直に讀むやうな事をしない。彼は引出しの中に入れて鍵をかけて置く、そして全一週間見ないで置く。その週の終りにその七つの原稿とその性質をそれぞ

れはつきり想ひ出せるかどうかを見ようとする。極めてはつきり三つは想ひ出せる、あとの四つはすぐには想ひ出せない。もう少し努力してもう二つは想ひ出せるが、二つは全く忘れてしまつた。これは一大缺點である、二回も讀んで何等の印象を殘さないやうな著述は、本當の價値がない。彼はそこで引出しから原稿を取出して、二つ——想ひ出せない二つを沒書とする、それからあとの五つを再讀する。三度目に一切判定される——題、仕上げ、想、文學上の品位など。三つは第一流ときまる、二つはたゞ第二流として書肆で受取られる。それでこの事が終る。

こんな事が凡て大出版書肆で行はれる、しかし不幸にして悉くの文學上の著作はこれと同じ嚴重な方法では判斷されない。今日はむしろ公衆の好みで判ぜられるが、公衆は最上の物を好まない。しかしケムブリッヂ大學やオックスフォード大學の出版部のやうなところでは、原稿の檢定は實際非常に嚴しいのである。再びどこでもこれ程までには讀まれないと思ふ程、充分によく讀まれるのである。さてこの專門の讀書家はそんなに知識や學問

や經驗はありながら、子供がお伽噺を讀むと餘程同じやうにして書物を讀むのである。彼はその精神の全力を注いで、書物のうちにある一切の物を、その凡ての關係から、その無數の方面から詳細綿密に考へる事は子供の頭腦が考へる事と同じである。子供は惡い讀者であるとは僞りである、惡い讀書の習慣はずつと後になつてできるので、不自然である。自然の、そして又學者風の讀書法は子供の方法である。しかしそれには私共が年と共に失ひ易い物、即ち忍耐と云ふ貴い天賦の物が要る、そしてこの忍耐がなければ、何事も、讀書でも、よくはできない。

それで注意深い讀書法は大事であるから、それを濫用してはならない事を諸君は容易にさとる事ができる。よく訓練された高い教育を受けた精神の力は普通の書物の上に浪費されてはならない。普通と云ふのは安つぽいつまらない文學の事である。「自己修養に取つて書籍の遺當な撰擇程大事な事はなく、又それ程輕んぜられて居る事もない。」有能の人は何を讀むべきかを「見つける」のに時を空費する事も正しくない。その人は造作なくあらゆ

る方面の文學のうちの最良の物の範圍を正しく知つてゐて、その最良の物を尊重する事ができる。勿論特殊の研究家、批評家、專門の讀者になる爲には、よい物も惡い物も皆讀まねばならない、そして經驗でできた非常に速い判斷力を働かせて、多くの苦痛を逃れる事ができる。例へば、セインツベリ教授のやうな批評家によつてなされたに相違ない、そして充分になされたに相違ない讀書を想像して見るがよい。彼の大學教育、それから、先づ中々の讀書を要するギリシヤ、ラテンの古典に通達した點を離して見ても、凡ての世紀の英語で五千冊位は讀んだに相違ない――それだけの書物にある一切の物、それぞれの歷史、それからできるだけその著者の歷史を充分に學んだに相違ない。彼はこの文學と云ふ大きな一團に關する社會上及び政治上の歷史を充分に學んだに相違ない。それでもこれは彼の仕事の半分にも足りない。二つの文學の權威であるので、彼のフランス語の研究、新舊フランス語の研究は、英語の研究よりもさらに一層博かつたに相違ない。凡てこれ等に關する著作の研究は熟練なる讀書による外はなかつた、全體に於て始めから終りまで娛樂らし

い處は少しもない。ただ娯樂らしい處は結果にあるだけ、しかし其の結果は非常に大きい。

「何がこの世でむづかしいと云つても書物を讀んでそれからその書物の文學的價値を丁度數行で明瞭に、そして正しく云ふ事程むづかしい事はない。これが出來る人は全世界に二十人以上はゐない、それには絶大なる經驗と才能を要するからである。普通の人で、一生學問勉強しても、三流四流の批評家になれる見込のある人も中々ない。しかし私共は讀書法を學ぶ事はできる、それが決して小さい事ではない。大批評家は彼等の判斷によつて、これをなす方法を私共に教へる事ができる。

しかし要するに、最大の批評家は公衆である——一日や一代の公衆でなく、數百年の公衆、時と云ふ恐るべき試驗で、試された書物に關する國民的意見及び人類の意見の合同一致である。評判は批評家によつて作られるのでなく、數百年の間の人間の意見が集合して作られる。それから人間の意見は、學問のある批評家の意見のやうに判然ときまるのではない、私共はその性質を適切に說明する事のできない何か大きな情緒のやうにぼんやりし

て居る、それは思考でなくて感情である、ただ「それが好き」と云ふだけである。それでもこの種類の判斷程たしかな判斷はない、即ちそれは絶大の經驗の結果であるからである。よい書物の試驗は數代の間に渡つて働く人類の意見によつて行はれるものである。そしてこれは甚だ簡單である。

「偉人なる書籍の試驗は、私共がそれをただ一度か或はそれ以上くりかへして讀みたいかどうかによつてきまる。」

實際眞に偉大なる書物なら、私共は始めてそれを讀まうと思つた時よりも、さらに一層二度目にそれを讀む事を欲するのである、そして私共がそれを讀む度毎に、その中に新しい意味と美を見出すのである。教育のあるよい趣味の人が、一度以上は讀みたくないと云ふ書物は大概餘り價値はない。」以前あの偉大なる小說家ゾラの技倆について甚だ巧妙な議論が行はれた、或人はゾラは大天才を有して居ると主張し、或人はゾラはただ著しい種類の才能を有して居るだけだと主張した。その烈しい議論で大分突飛な意見も出て來た。しか

し突然甚だ偉大な批評家が單にこんな問題を出した、「ゾラの書物のどれかを二度讀んだ人或は二度讀みたいと思ふ人はあるか」誰も返事をする者はなかつた、それでこの問題は解決した。多分ゾラの書物を二度讀まうと思ふ者はない、そこでこれが即ちそのうちに偉大なる天才はない、最高の種類の感情が立派に出てゐないと云ふ充分な證據である。十萬の讀者に買はれても、決して二度讀まれない書物はどんな書物でも、淺薄か虚僞である。しかし私共はただ一人の判斷を誤りのない物と考へる事はできない。一冊の書物を偉大であると認むる意見は多數の人の意見でなければならない。即ちたとへ大批評家でも、分らない事鈍感な事がどうかすると有り勝ちである。たとへばカーライルはブラウニングを好まなかつた、バイロンは英國の大詩人のうちで幾人かを嫌つた。多くの書物に對して信ずるに足る批評をする人は、多方面でなければならない。私共は時々ただ一人の批評家の判斷なら疑ふ事があるかも知れない。しかし數代に渡つた人々の判斷を疑ふ事は出來ない。たとへ私共は數百年間感嘆賞讃された書物のうちに、何等よいところを認める事ができないで

もそれを丁寧に調査研究して見ると、最後にこの感嘆と賞讃の理由をさとる事ができるやうにならう。貧しい人に取つてあらゆる書庫のうちの最上の物は、こんな大著述即ち時の試驗に合格した書物で全部成立して居る書庫であらう。

○「それで讀書の撰擇に關して、私共に取つて最も大事な案内はかうであらう。私共は二度以上讀まうと思ふ書物だけを讀むべきである、それから何か特別に投資する理由でもなければ、それ以外の書物を買うてはならない。第二に注意を要する事は、凡てこんな偉大なる書物のうちに潜んで居る價値の一般の性質である。これらの書物は決して古くならない、永久に若い。偉大なる書物は若い人によつて、一讀だけでは理解されさうにはない、理解されてもただ外面だけに過ぎない。多くの場合に於て、そんな書物のうちにある物を發見するために人類が數百年を要した事を思はねばならない。しかし人が人生の經驗を積むに隨つて、その書物は新しい意味を生ずる。十八で面白かつた書物はもしよい書物なら、二十五では一層面白からう、そして三十になつたら新しい書物のような興味を感じよう。四

十になつて讀み直して、何故この美しさが前に分らなかつたらうと不思議に思ふだらう。五十六十になつても同じ事がくりかへされよう。偉大なる書物は讀者の頭の生長の割合に應じて生長する。シエーキスピヤやダンテやゲーテの著作を偉大にしたのは、これまでの數代の人々によつて、この異常な事實が發見されたからである。恐らくゲーテがこの場合一番よい例にならう。ゲーテは散文の小話をいくつか書いた、それは子供に取つてお伽噺の面白さがあつたので子供は好んだ。しかしゲーテはお伽噺のつもりではゐなかつた、經驗のある人々に對して書いたのであつた。青年はそのうちに眞面目な物を發見する、老人はそのうちに全世界の哲學、人生の凡ての智慧を發見する。鈍い人なら餘り發見するところはなからう、しかし人生に關するその人の知識の割合に應じて、それ等の話を考へ出した頭の偉大なる事を發見するであらう。

かう云つても、それはこれ等の書物の著者が、自分でその著書の中に入れた事の全體の廣さと深さを豫想してゐたと云ふ意味ではない。大藝術はそれが偉大である事を少しも知

らないで無意識にできる、それで作者の天才が大きければ大きい程、自分に天才があると云ふ事を知る機會は益々少い、それで、本人が死んでから餘程にならないでは公衆に發見されさうにはない。文學に於てなされた大事業は普通は自分で偉大と考へて居る人々によつてなされてゐない。數千年前アラビヤの或一漂泊者が夜の星を眺めて、世界を造つた見えない力と人間との關係について考へて、心を悉く一種の詩で吐いたのが、今日私共に殘つて居る「ヨブ記」である。ヨブに取つては蒼空は形のある丸天井であつた、その向ふに何があるか、それはヨブは夢にも考へなかつた。ヨブの時代より私共の天文學の知識はどれ程大きく發達したらう。私共は私共の天文學の器械で見えるところでは今三千萬の太陽があつて多分それぞれ行星を伴うて居るだらうから、多分總數三億の世界のある事を知つて居る。多分このうちの多數には聰明な生物も住んでゐるだらう、數年のうちには火星に私共の文明よりももつと古い文明のある事の確證が得られよう。宇宙に關する私共の概念とヨブの概念との間には、どんなに大きい相違があらう。しかしその實直なアラビヤ人かユ

ダヤ人の詩は、この相違があるからと云つてもその美しさと貴さの一小部分をも失つてゐない。全く反對である。新しい天文學の發見と共に、ヨブの言葉は――彼は眞に大詩人であつて、數千年前、彼の心にある眞のみを語つたから――私共にとつて一層偉大な意味をなすのである。又餘程昔、ギリシヤの或小說家が「ダフニスとクロキ」と云ふ田舍の少年少女について小さい話を書いた。それはこの上もなく簡素な言葉で、その少年少女が何故か分らずに愛し合つた事、お互に云つた無邪氣な事、それから大人達がやさしく彼等の事を笑つて、それから人生の最も簡單な法則を敎へた事を物語つてある小さい話である。つまらない題目と思ふ人もあらう。しかし其の話は世界のどの國語にも飜譯されて、今もなほ私共に取つて新しい話のやうに讀まれる、そして私共がそれを讀み直す毎に、それが一層美しく思はれる、それは無邪氣と少年の感情に感ずる本當のやさしい事をいくつか敎へるからである。それにある少年少女と同じく、その小說は決して老ゆる事はない。或はずつと後になつて、三百年程前にフランスの或僧が或學生の話を書かうと思ひついた、その學生

は或浮氣女に迷はされ、その女の爲に恥辱と苦痛のいくつかの場面へ引出された。「マノンレスコー」と云ふこの小さい書物は私共のために昔の時代、人は劍を帶びて髮に粉をふりかけてゐた時代、一切の物は今日の世の中と思ひ切つて違つて居る時代を表はして居る。しかし話は文明のどの時代にもつて行つても、私共の時代にもつて來ると同じやうに眞である、その話にある苦惱と悲哀は丁度私共自身の物のやうに私共を感動させる、それから心からの惡者ではなく、ただ弱くて我儘なその女も、その悲劇の結果まで丁度その女の犧牲となつた青年を魅したやうに讀者を魅するのである。ここに又世界の不朽の偉大な書物の一つがある。或は、百程のうちからもう一つ例を引いて、ハンス・アンデルゼンの話を考へて見よう。アンデルゼンは道德上の眞理や社會哲學は、他のどの方法によるよりも、小さいお伽噺や子供の話で敎へる方がよいと云ふ考を抱いた、それで數百の古風な話を藉りて、アルデルゼンは新しい幾組かの不思議な話を作つたが、それがどこの文庫圖書館にもなくてはならぬものになつて、どこの國々でも子供よりもかへつて大人に讀まれて居る。

この驚くべき話の集まりのうちに、人魚の話がある、それは諸君は皆讀んだ事があると私は思ふ。勿論人魚と云ふやうな物はない、見方によつてはこの話は全く不合理である。しかしその話の表はす無私と愛と情緒は不朽である、そしてそんなに美しいので、私共はその外形のうそらしい事は全く忘れて、ただその寓話のうしろにある永久の眞理をのみ見るのである。

今諸君は偉大なる書物と云ふ意味を正しく理解したであらう。書物の撰擇についてはどうであらう。數年前サー・ヂョン・ラボックと云ふ科學者が世界最良の書物と彼が云つた物　或は、少くとも最良の書物百種の目錄を書いた事を諸君は覺えて居るだらう。サーヂョンの例にならつて、外の文學者も亦自分等が最良と考へた物の目錄を銘々作つた、それでこんな經驗の價値を私共に示すべき時が充分經過した。出版書肆に對する外には、これは全く價値のない物ときまつた。その百部の書物を買ふ人は多いだらうが、讀む人は極めて少數である。これはサー・ジョン・ラボックの考が惡いわけではない、多數の色々違

つてできてゐる頭腦に對して、讀書の一定した進路を定める事は誰にもできないからである。サー・ジョンは自分に最も氣に入つた物について自分の意見を發表しただけである、外の人なら違つた目錄を作つたであらう、多分二人の學者で全く同じ目錄を作ることはできなかつたらう。偉大なる書籍の撰擇は、如何なる事情があつても、銘々個人的でなければならない。つまり諸君は諸君のうちにある光明によつて、銘々に選ばねばならない。文學の色々違つた種類に最良の注意を進んで與へられるやうな、それ程多方面な人は極めて少い。平均して人は一種類の小題目――自分の天賦の才能嗜好に最も一致する題目、自分の氣に入つた題目に自分を制限して置く方がよい。そして何人も私共の個人的性格氣質を充分に知らないで、又それに同情しないで、どこに私共の能力があるかを私共のためにきめる事はできない。しかし一つの事はできる――即ち、第一に、文學のどんな題目が諸君にこれまで興味を與へて來たかをきめる事、第二に、その問題について書かれた最良のものは何であるかをきめて、それからそれと同じ問題に關係あるやうでも、實は未だ大批評家もし

くは大輿論の賞讃を得てゐないやうな、はかないつまらぬ書物は除外して、その最良の物だけを研究する事である。

そんな兩方の賞讃を得た書物は諸君の想像する程澤山はない。銘々の大文明はギリシヤ人の文明だけを除いて第一流の書物は二三冊づゝしか出してゐない。凡て大きな宗教の教を含んで居る聖い書籍は文學としても當然第一流である、その理由は、それが書かれた國語で、できるだけ最上の文學的完全に達するまで幾度となくみがかれて來たからである。民族の理想を表はす偉大なる叙事詩も亦第一流に置く價値がある。第三に人生を反映せる戯曲の傑作も最上の文學に屬する物と考へられねばならない。しかしどれ程の書物がこのやうに代表されるであらう。澤山はない。最も良い物はダイヤモンドのやうに大量には決して發見されない。

私はこの通り敢て云ふて見た一般的注意の外に、二三の精選した書物——學生がそのよい版を買ふて一生讀んでよい書物に關して少し云つてもよからう。澤山はない。歐洲の學生

に取つてギリシヤの作者の多くを擧げる事が必要であらう。しかし古語の研究をしないでは、こんな作者はこの國の學生にそれ程必要はなからう、その上ギリシヤ生活とギリシヤ文明の著しき知識はそれ等の正しい理解を起さしむるに必要である。かう云ふ知識は、彫刻、繪畫、貨幣、彫像によつて——存在した物を、想像力によつて見られるやうにする藝術品によつて最もよく得られるのであるが、今のところ、古典研究の美術方面は繪畫その他の材料がないので日本では殆んど不可能である。それで私はこの範圍に屬する傑作については殆んど云はない。ただ歐洲文學の全體の基礎は古典研究にあるから、學生はギリシヤ神話、及びギリシヤ文學及び戯曲の最上の物を皷吹した傳説の概要を充分に理解する事をたしかに努めねばならない。諸君は文學の高い階級に屬する英書を開いてギリシヤ信仰、ギリシヤ物語、或はギリシヤ戯曲に關係のない物は殆んどない事を見るであらう、神話は諸君に殆んど必要である、しかし其題目の範圍が餘りに廣いので、大概の人はそれを充分に研究しようとする氣がなくなる。しかし充分の研究は必要でない、必要なものはただ概要である。

そして諸君にはつきりした面白い書方で、その概要を與へる事のできるよい書物は非常に役に立つ。フランス語やドイツ語にそんな書物は澤山ある、英語では私はただ一冊、ボーン文庫にあるカイトレイの「古代ギリシャ伊太利の神話」を知つて居る。それは哲學的精神で敎へると云ふ珍しい長所をもつて居る。名高いギリシャの書籍について云へば、諸君にとつてそれらの大概の價値は餘りないに相違ない、適當な飜譯の數が少いからである。私はまず韻文譯は凡て無用であると云ひたい。ギリシャ語の韻文譯ではギリシャの詩を飜譯することはできない——テニスンの飜譯したホーマーが二三十行程ある、それから同じ程有能の人が飜譯した他のギリシャ詩人の數行がある、それ等は皆宜しい。しかしギリシャ或はラテンの作者を研究したければ、どうしても散文譯を取る方がよい。勿論私共は第一にホーマーを考へねばならない。英語に二つの散文譯がある、一つは「イリアッド」ので一つは「オディッセー」のである。この二つの大叙事詩のうちで、あとの方が殊に大事である。それに關する引照は文學の凡ての部門に無數にある、そしてこの引照はいつもその題

の詩に關係がある、即ち「オディッセー」は「イリアッド」よりももつと傳奇的であるからである。ラングとブッチャーの散文譯の長所は、散文ではあるが、ギリシャの詩の流暢な句調と音樂を幾分保存して居る點にある。その書物は諸君が絶えず持つて居る價値はたしかにあると私は思ふ、その効用は後になつて現れて來るであらう。ギリシャの大悲劇は悉く飜譯になつてゐるが、これらの飜譯を私は甚だ熱心には勸めたくない。大概の場合に外の方面から、その戯曲の話を知る方がよからう、そしてそんな物は數百ある。諸君は少くともソフォクリーズ、エスキラス、それから殊にユウリピディスの大戯曲の題目を知らねばならない。ギリシャの戯曲は、正しく理解するには餘程の研究を必要とするやうな方法で組立ててある、諸君は考古學者のやうにこれ等のことを理解する事は必要ではない、しかしこれ等の戯曲の話を幾分知つて居る事は必要である。喜劇に關しては、アリストファニースの著作はその價値と興味に於て全く無類である。說明を要する處はない、數千年前アゼンス人を笑はせたと同じやうに今日私共を笑はせる、それでその著作は不朽の文學で

ある。抒情詩人のうちでは、近世の物だが英語の古典となりさうな飜譯が一つある、それはセオクリタスのランゲの飜譯で小さい本だが、その種類のうちで甚だ貴い物である。諸君は私が極めて少數だけを云つて居る事が分るだらう、しかしこれ等少數の物は、もし諸君が適當に使用すれば、諸君に取つて大きな意味になるだらう。後のギリシャの作、古い文明の衰頽期にできた作のうちで、世界の人が決して飽くことのない一傑作がある――それは前に云つた「ダフニスとクロヰ」の物語である。これはどこの國語にも譯されて居るが殘念ながら最良の飜譯は英語でなく、フランス語――アミヨーの飜譯である。しかし澤山英語の飜譯はある。これは諸君は必ず讀まねばならない。ラテンの作者についてここに澤山云ふ必要はない。ヴァーヂルとホレイスの甚だ良い散文譯はあるが、これ等の作の價値はラテン語の知識がなければ諸君に取つて大した物ではない。しかしながら「エニード」の話は知る必要がある、それでこれはコニングトンの飜譯で讀んだ方が最も良からう。諸君の一般教育の進行中、重なるラテンの作者や思想家に關して幾分知らないわけには行かな

い、しかし諸君が餘り名を見た事のない一つの不朽の作がある、そしてそれは誰でも讀むべき書物である――それはアピュレイウスの「黃金の驢馬」の事である。よい英語の譯がある。それはただ魔術の本であるが、最も不思議な物語で、一時の文學でなく世界の文學に屬する物である。

しかしギリシャの神話は、美はしい點に於て永久に不滅であるが、私共の言語の形、曜日の名までにずつと反響を殘した古い英國の宗教、北歐民族の宗教よりも、もつと密接に英文學に關係があるとは云はれない。英文學の學生は北歐神話について幾分知るべきである。それにはやはり美はしいところ、別の變つた種類の美はしさが澤山ある、そしてそれはこれまで存在せる最も高尚なる戰士の信仰の一つ、力と勇氣の宗教を表はして居る。諸君は今圖書館に北歐詩歌の完全なる集をもつて居る、それは二卷の「コルブス・ポエティクム・ボレアリ」(北歐詩集)の事である。不幸にして諸君は未だ「サガ」や「エッダ」のよい叢書をもたない。しかしギリシャ神話のもつと大きな題の場合に於ける如く、英語

に小さい書物があつて、北歐民族の宗教と文學の兩方に關する大事な事――即ち諸君に取つて必要な事――の概要を悉く書いた物がある、それはマレットの「北歐の古事」である。サー・ウォルター・スコットはこの小さい書物に、色々の飜譯の最も價値ある部分を寄稿して居る。それでこれらの飜譯は時の試驗に著しくよく堪へて來た。ビショップ・パーシーの序論は古めかしいが、しかしそのためにこの書物の生々した價値を少しも下げる事はない。私は悉くの學生が心がけて持つべき書物の一つと考へる。

外國語から英語に飜譯された近代の大傑作に關しては、私はできるだけ原語で讀む方がよいとしか云へない。ドイツ語でゲーテの「ファウスト」を讀む事ができたら、英語で讀んではならない、ハイネをドイツ語で讀めるなら、ハイネが監修したフランス語の散文譯も、英語の韻文譯（それは澤山ある）も諸君には無用である。しかしもしドイツ語がむづかし過ぎるやうなら、ヘイワードの散文譯でブッハイムの校閲した「ファウスト」を讀む方がよい。それは圖書館にあつて、現在ある種類のうちで最良の物である。「ファウスト」

は人が買うて、座右に置いて、一生の間度々讀むべき書物である。ハイネについて云へば、彼は世界的詩人である、しかし飜譯では著しく見劣りがする、それで私はフランスの散文譯だけを勸める、ブラウニングとラゼイラスの他の英語譯は少し力が弱い。數年前にハイネのすぐれた飜譯が連續して「ブラックウッド雜誌」に現れたが、私の信ずる處では、未だ書物にはなつてゐない。

ダンテについて云へば、私は伊太利語以外のどの國語に於ても、諸君に強く訴ふる事ができるかどうかを知らない、それからダンテの偉大な事を理解するためには中世紀を充分に理解せねばならない。私は外の伊太利の偉大なる詩人達について同じ事を云ふ事ができる。フランスの戯曲家のうち、諸君はモリエールを研究せねばならない、モリエールは重要な點ではシェーキスピヤにつぐだけである。しかしモリエールは飜譯で讀んではならない。ここで私はフランス語を讀めない人はモリエールはそのままにして置く方がよいと斷然云ふ、英語では纖細な機智や諷刺は譯出する事はできない。

近世の英文學について云へば、私は私の講義中に、世界文學のうちに位置を取る程の價値のある少數の書籍をあげる事を心がけて來た、それでそれをここにくりかへす必要はない。しかし、少しふりかへつて、私は再び諸君にマロリーの書「アーサーの死」の非常な價値を思ひだして貰ひたい、そしてそれは諸君は買うて側において屢々讀むべき極めて少數のうちの一つである事を云ひたい。西洋武士道の精神は全部その書物のうちにある、そして私はその武士道の精神と凡て近代の英文學との關係の如何に深いかは諸君に語る必要は殆んどない。言語の或特別の研究をする考でなければミルトンを讀むことを勸めない、ミルトンの語學的價値はギリシヤとラテン文學に基づいて居る。ミルトンの抒情詩に關しては—それは別問題である。それは研究すべきである。暗示的に云ふ事の外、もう云ふ事がないから、私は諸君は悉く、シエーキスピヤのよい版の一部をもつて毎年一度讀む方がよいと思ふ、最初は文句はすつかり分つても分らなくても頓着せずに讀む方がよい、それはあとで分つて來るから。諸君がもしこの助言に隨へば、シエーキスピヤは諸君が讀む度毎

に、大きくなつて、そして最後に諸君の考方と感じ方に甚だ強い、甚だ健全な影響を與へるやうになる事を私は信ずる。シエーキスピヤを讀むには大學者になる必要はない。それからシエーキスピヤを讀む事について本當である事は、凡ての世界の大傑作について、程度は小さいが、同じく本當である。ゲーテの「ファウスト」についても本當である。ホーマーの詩も最もよい章についても同じく本當である事が分る。モリエールの最上の脚本についても本當である。ダンテについても、昨年講義をした英語のバイブル中のあの篇についても本當である。それだから、若い讀者に與へられた古いが、しかし甚だすぐれた助言を一つくりかへしてこの講義を終るのが一番よいと私は思ふ、「誰でも新しい書物が出版されたと聞いたら、古い書物を讀め」

讀書及書籍

二、讀書及び書籍

ケーベル

エッケルマンの『ゲーテとの對話』。讀書及び書籍。美的享樂。ホメロス。パウル、ハイゼ。研究と性格。アミエルの『日記』。リヒテンベルヒの觀念論觀。實用主義。

此間私は再びエッケルマンの「ゲーテとの對話」をめくつて見た、さうして亦もやこの書について極めて屢々爲した經驗を重ねたのである。卽ち私は、此書が決して完了(パーフェクト)の形を以て語られてはならぬ、——常に現在の形で語られねばならぬ——所の僅少の、永遠の書の一つであることを感じたのであつた。更に詳しく言へば、「人は決して、余はそれ等を讀んだ(Ich habe sie gelesen)と言つてはならぬ、むしろ、余はそれ等を讀んで居る(Ich lese sie)

――繰返し繰返し、余の最後の日まで讀むのだ、と言ふべきである。私はこの書を殆ど暗んじてゐると云ふことが出來る。しかもそれを繙く毎にいつも、其中に私の未だ氣付かなかつた事、もしくは充分に熟考し又考へ拔かなかつた事や、要するにまだ少しも理解しなかつたといふべき幾多の事や、又それについて他の――私の讀者や、友人や、學生達の――注意を喚起することを忘れてゐた極めて多くの事を見出すのである。特にこの最後の種類に屬するゲーテの詞の中には、我等がそれに就いて更に長き且つ更に詳細なる彼の說を聽きたいと思ふやうな眞理を含んでゐる場合が多い。讀書に關するものゝ如きは即ちその一例である。――エッケルマンは、この興味多き且つ重要なる題目についてゲーテの述べた二つの極めて意義深き、しかし餘りに短簡なる所說を傳へてゐる。私は、兩回共に會話が繼續されずして、單なる「云々すること」(dergl.)を以て中絕してゐるのを遺憾とする。ゲーテが我等に敎ふるところのものは實は唯、それに據りて爲さるゝ時にのみ讀書が精神生活にとつて價値あるものとなり得る如きその形式に關する事柄に過ぎないが、我等はこれを以て

滿足するの外はないのである。しかしながら我等は何を又如何に讀むべきか。これ言ふ迄もなく先づ第一に答へらるゝを要する所のものである。次に答を待つてゐるものは、何時我等はこの書を、何時かの書を讀むべきか、である。何故に丁度今この書を、そして他の時に彼の書を(讀むべきか)? 是等はすべて、決して閑問題ではなく、寧ろ主題の本質に關せるものである。――

惟ふに、尙この外にも、敏感なる、殊に美的敎養ある讀者にとつては、丁度上に列擧したるものにも劣らず重要であるところの諸種の問題が在る。即ち版の大小や、本の大いさや、印刷や、表裝の色合や、新舊の度や、挿畫と註釋の有無や、瑣事に拘泥する小學校敎師臭い傍註(讀者の書き入れ)を以て汚されてゐるかといふこと其他の如き。かくの如き外形的餘事は一種の歷史的、普遍人間的―心情的、美的、道德的價値を有するものである。是等はその書物をば我等にとつて愛すべく貴ぶべきものたらしめ得ると共に、また一度限りでそれを嫌厭するに至らしめることも出來る。否、それ等は往々にして正さしく我等の感情を

害したり又我等を怒らせたりすることもあり得る、――就中かの無恥なる「批評的」傍註や、疑問並びに間投詞符の如きはその最も甚しきものである。厚顏なる讀者は之によつて他人の、屢々公設機關から借出した書物をすら――往々色鉛筆を以て――汚すを常とするのである。一體書物を、しかも偉大なる文人の著作をすらかく取扱ふといふこの廣く行はれてゐる賤民的習慣は、これ獨り著者に對してのみならず、その書を手にする總ての人に對しても侮辱を加へるものと謂ふべきである。しかも猶ほ侮辱を加へらるゝ事の最も少いのは著者その人である、何となれば彼は常に、「愚昧より批難さるゝは名譽なり！」(Pulchrum est a stultitia vituperari ! Erasmus) の一語を以てその傍註者を擊退し得るからである。

「私の謂ふ所の、エッケルマンの中の二つの箇所とは即ち次の如くである。

一八三一年三月九日にゲーテはかう言つて居る。「一體人は餘りに多くつまらぬ物を讀み過ぎる、その結果時間を浪費し、しかも得るところは毫も無いのである。元來我々は常に

唯、我々の驚歎するものゝみを讀むべき筈である、これ私が私の幼時に實行したところ、また現に今ウォルター・スコットに就いて經驗してゐる所である。私は今「ロブ・ロイ」(Rob Roy) を讀み始めた許りである、さうして之から續けて彼の最上の小說を順次に讀まうと思つてゐる。」――

それの眞實であることは姑く全然眼中に置かずとして、是等の詞は私の想像の中に尙一つの美しく氣高き風俗畫(ジャンルビルド)を呼び起すのである！　私はその世を去る一年前の偉大なる老詩人が、なほ精神的靑春と淸新と及び子供のやうな心の落着きとに充ち、「少しく秩序の亂れたらしき中に秩序のある、少しくチゴイナー風」に見える部屋の中で、頭を凭せる所もついてゐない古い木製椅子に倚つて、靜觀に耽つてゐる淨化せる姿を見る。彼は、一卷の書物を手にしてゐる――彼の歎賞するウォルター・スコットの小說を。彼は、現代の靑年が時代後れで稚氣を帶びてゐると稱して、もはや手に取らうともしない所の、この詩人の作つた樣々の物語を讀んで樂んで居るのである！――序ながら、曾て或る英吉利人の語學敎

師は私に向つて、現時の年若き英吉利人のディケンスに對する態度も亦同樣であると言つた、加之彼等はディケンスの文章はもはや自分達には充分に解らないとまで主張してゐるといふ。——

一八三〇年一月二十五日、ゲーテは、『讀書の困難について、また毫も準備的研究もせず豫備智識も有せずして、直ちに何れの哲學的並に科學的著作をも、恰も單なる小說でゝもあるかの如くに心得て、讀まうとする多くの人々の自惚に就て戲を言つた。——彼は語を繼いで言ふ。「是等のお芽出度い先生達は、讀書することを學ぶために人が如何ばかりの時間と勞力とを費したかといふことを知らないのだ。私はその爲に八十年を要したが、しかも今なほ、自分は標的に達した、と言ふことは出來ない。」』

されば我等は唯、我等の驚歎するものゝみを讀むべき筈なのである！　この優れたる忠言をばゲーテの謂つた通りの意味に於て應用することは、既に讀書の困難を解せる且つ讀書術において最早可成りの進境を示せる如き人にして初めて能くする所であるといふこと

は明かであらう。何故かといふに、ゲーテは、獨り眞實の驚歎に價するものゝみの、卽ち眞に價値多きもの、美なるもの及び偉大なるものゝ驚歎されんことを要求してゐるからである。かくの如きものを驚歎するには、我等は勿論先づ第一に、それを認識することを及びそれをば意義なきものや劣惡なるものと區別することを學び知つてゐなければならない、然るにこれ復た極めて多種類に亘る僅少ならざる知識と、確乎たる美的判斷と、陶冶されたる趣味と、豐富なる經驗と及び實際的智慧とを前提するものである。更に又その國語の特徵に對し、その音樂やその好音や、その節奏的並に音律的美に對しては發達したる耳を持つてゐなければならぬ。最後に、讀者の心眼と想像力とは、單に詞を以て畫かれたる形象をば、詩人自らが觀たと同じ程度に明瞭に觀得るまでに發達してゐることを要する。さうして讀書術の學習し難き所以の大部分は蓋しこれらすべての能力及び知識の獲得と、發達と精化といふこと以外には存しないのである。然らざる場合には——卽ち單に驚歎其者が、もしくは驚歎（Bewunderung）と言ふよりも寧ろ驚異（Verwunderung）が、語を換へて言へ

ば、驚異の念に襲はれるといふ單なる精神的狀態が問題であるとすれば――苟も讀書する程の者は、何人も、(最も教養の缺けたる人といへども)正當の理由を以て次の如くに答へ得るであらう。グーテの忠言は既に時機を失して居り且つ全く不必要である、何故ならば彼も亦――(彼にして株式新聞などの讀者でない限り)――常にたゞ自分の驚歎するところのものゝみを讀むからである。然らば斯かる人は一體何を驚歎するのであるか。それは即ち「興味を惹くもの」、魅するもの、興奮せしむるもの、煽情的なるもの、自分を「攫む」(ひどく感動せしむる)もの等である。かくの如き讀者は著書や又は戲曲の美的價値を評價するに、獨りそれらが彼等の内なる「動物」の上に及ぼす效果の强弱如何を以てする。彼の本質の「下方の階段」において理解される所のもの、彼の心情の下級の諸力に關係あるところのもの、彼の「意志」に觸れる所のもの――たゞ之のみを彼は驚歎する、しかもまた彼の驚歎し得るは獨りこれだけなのである。

× × ×

思ふに、讀書術の何たるやを理解せんとならば、我等は先づ第一に、總じて人間は何故に讀書するか、もしくは、一切の又各々の讀書の一般的目的は何であるか、を自ら明かにしなければならぬ。次に我等の問ふべきは、讀書に際して人の追求し得るところの、且また經驗上實際追求してゐる所の、諸々の特殊目的は何々であるか、といふ事である。

特殊の目的を問へば、從つて、亦それを成就するための特殊の手段をも問はねばならぬ。しかも手段は明かに目的よりも比較し得べからざる程多く在るに相違ない。一つの標的に達すべき途は幾千も在り得る。幾千の書物は、讀書界の極めて多樣なる目的に――否、全然個性的なる目的にすらも――仕へんがために現存して居り、且つ尙絕えず書かれつゝある。一定の標的に達すべき最も樂な、最も確實な且つ最も近い道は何なりや、との問は畢竟、これを精神生活の領域に、教育と教養との上に當嵌めるならば、かの古い周知の、今や多少陳腐となりたる、最上の書物は何々なりや、との問に外ならぬ。――しかしながらこの問に答へたゞけでは、まだ〳〵決して充分とは言へない――總じてあらゆる質問者を悉く滿足

せしめる様な答を與へることが出來ると假定するも（これ私の非常に疑問とする所であるが）。手段を知るだけでは未だ充分でない、我等は亦如何にしてそれを適用すべきかを知らなければならぬ。我等は、如何に良書を讀むべきかを知らなければならぬ。これは讀書論に於ける重要なる、且また容易からざる一章を成すところのもので、狹義に於て讀書術と呼び得るものである。

之に關しては多く語られたり又書かれたりする。また實際この題目たる、青年にとつても、老人にとつても、學ぶ者にとつても、教ふる者にとつても、勤勞者にとつても遊民にとつても、男にとつても女にとつても、（之を要するに、それが强制的であると自發的であるとに論なく）、苟も讀書する一切の人々にとつて極めて興味あり且つ重大なる意義を持つてゐるのである、だから私は、教養ある人も又教養なき人もすべてその讀書に關する意見を我等に知らせてくれるやうにと、また彼が凡そ文獻に關して有する自身の經驗や、觀察や、思出や、道樂や其他を書留め置くやうにと希望したい程である。極めて若い人達、即

ち學校生徒や、あらゆる社會階級に屬する少年少女の手に成るこの種の覺書は、私にとつては――心理學的乃至文化史的見地から見て――一種特別の價値を有するであらう。

わが好意ある讀者はどうか驚かないやうにして戴きたい！　私は別に讀書論を以て讀者を饗應しようとしてゐるのでもなければ、また彼等に向つて、良好若しくは「最上」の書籍の新らしき表を提示しようと思つてゐる譯でもない。私はたゞ、總ての讀書家がこの題目について二三の感想を述べんことを丁度上に希望して置いたのと同じ事を自ら實行しようとしてゐるに過ぎないのである。

高尚とか、低級とか、可もなく不可もなきとか又平俗とかいふ價値標準は、精神の世界にも、即ち學問や、文學や又藝術にも當てはまる。學問と藝術とはその本質上その取扱ふところの對象を悉く高貴ならしめ、またそれ等は最も賤劣なるものをも高尚にする、言はゞ「善惡の彼岸」に移す、從つて全然道德的評價を超越する、と主張する者あるも、それは眞實とは言はれない。就中藝術家は、シルラーの彼等に與へたる勸誡をば常に心肝に銘

してゐなければならぬ。「人間の尊嚴は汝等の手に委ねられたり、そを護れ！　汝等沈めばそは沈み、汝等昇ればそは昇るべし！」もし藝術品にして我等の道義的生活にとつて一種のアディアフォロン（ストア哲學者の用語にして、どうでもよきもの、何等の影響を及ぼさぬもの、意）であるならば、また藝術の領域において高尚と下賤といふ反對が存しないとしたならば、上の如きことを說くは愚昧と謂ふべきであらう。

精神的生活に於て高尚と稱し下賤と呼ぶものは、高尚なるもの乃至下賤なるものを追求するの謂である。書籍――私は學問上の物をも除外しない――の仕へる目的にも高下の差別は在る。讀者の追求するところの目的にもまた高下の別がある。幾多の人々は――しかもそれは決して最惡の讀書家ではない――讀書に際して歷史的乃至學術的知識の增大をも、哲學的認識の擴大をも、倫理的乃至宗敎的意識の深化をも、慰勵をも、美的享樂をも念頭に置いてゐない。この種の讀者が書籍のうちに索むるものは、心をも想像をも魅する如き物語（パーレ）か、然らざれば肩の凝らぬ、氣持よき無邪氣な面白い話である。物語の題材や、「話（ファブル）

の筋（ペン）」や、生々と物語られたる冒險的事件の充溢や、――この種の讀者を魅するところのものは實に、是等であつて、說話者の技巧や才氣では決してない。彼等の最も好んで讀むのは叙事詩的のものである、さうして多彩の觀を呈すれば呈する程、彼等は益々それを好むのである。――これは子供が物を讀む時の態度と大して遠はない（我等も曾ては同じやうにして「革の靴下」や「メイン・リード」抔を讀んだものであるが）。戲曲や抒情詩は是等の幸福なる人達のために書かれてゐるものではない！　私は今なほ時折かういふ態度で讀むことが出來、さうしてそれに悅樂を感ずる者であることを告白する。否、私は殆どこの事を誇としてもよいのである、――我等を幸にする如き天禀を有するの故を以て、それに對して（神の）攝理に感謝する代りに、自らそれを誇とするといふ態度が若し罪ある許すべからざる事でないならば。

子供のやうな態度で詩歌を樂むの能力を失つた人――例へばホメロスを讀むに際して、たゞ文法家や、言語學者や、文化史家や、批評家の眼を以てし、また得意になつて、且つ

特別の熱心を以て、その弱點を、卽ちその寢衣を着てゐるところや、「居眠をしてゐるところ」(Quandoquebonus dormitat Homerus.「流石のホメロスも時には居眠することあり」)之はホラーテイウスの作詩論 Ars poetica 中の有名なる句)を示す如き箇處に限り之を搜し出してその表を作つたりする種類の人、さういふ人は自ら非常に不幸な人間だと感ずるに相違ない。一體我等は凡そ人間的なるものに、藝術や、科學やまた哲學の上における最も偉大なるものにも、必然的に附纏ふところの些細な矛盾や缺陷をして、その作物が全體として有する美若しくは眞を驚歎することを妨げる程の力を我等の知力と想像力との上に振はしめてもよいであらうか！ 例へばオデユッセー（第十編）の中のかの實際幾分滑稽なる（既に幼時から常に奇妙だと私に思はれたところの）不條理は、卽ち巨人國のレストリゴーニア人の中で獨り其王女のみが巨人でなかつたやうに描かれてゐること、語を換へて言へば彼女がオデユッセウスの伴侶達に巨人と見えなかつたといふこと、（思ふに彼等はこの少女をば岐度普通の「人の子」と見たに相違ないのである、もしさうでなければ、彼等は怪物を一目見ただけ

で驚愕し、必ず立所に踵を廻らし大急ぎで自分達の船の方へ遁れ去つたであらうから)、このことは果して私がこの詩を味ひ樂む上においてどうしても邪魔にならずにはゐない筈のものであらうか！ 一體此不條理たる別に問題とするにも足らぬことではないか。これ畢竟大いなる奇蹟に充てる物語の中に小さき奇蹟が一つ餘計加はつたといふに過ぎない。我等は、他のすべての物と同じやうに、書物をも亦樣々の側面から觀察することが出來る、さうして同一の書をも種々の目的を以て讀むことが出來る、卽ち今日はこの意圖を以て、明日は又別の意圖を以て讀み、必しも常に同じ頭腦を以てせず、同じ眼と同じ耳とを以てしないことが出來る。何故耳に言及するかといふに、蓋し我等は耳を以て讀むことをもしなければならぬからである。特に自分で物を書く時には。——私は、同時に詩人でもありさうしてホメロスをば、例へばヘルマン・グリムが、イリアスに關するその美しき書をば「所謂ホメロス研究なるものとは無關係に」書き得るためには、屹度取つたに相違ないと思はれるやうな、あゝいふ態度で讀むことの出來る學者は幸福だと思ふ。が、しかし恐らくなほ

一層幸福であらうと思はれるのは、未だホメロスの名さへ耳にしたこともなくして、しかもこの詩をば、若年者の無偏見と新鮮な、純粹な心と、また、三千年前の希臘人がそれを受取りさうして讃歎した時に示したのと同じやうな感じと想像力との強さを以て讃歎し且つ己が内に攝り入れることを能くする如き無學者(ライエ)である！　私は嘗てある劇場監督に向つて、その當時ミエンヘンの王室劇場に於て屢々上演せられ、かつ大成功を收めたところの一戯曲が自分にはどうも餘り面白く思はれないといふ感想を漏らしたことがある。ところが彼は驚いたといふ風をして、詳細に且つ多くの才氣を以てその脚本を解剖し、すべての個々の點に對し、技巧上より見て特殊の精妙なる點や、美しき點に對して私の注意を喚起し、さうしてこの芝居の優秀なる所以を委曲に亘つて説明し始めたのである。私は興味を以て彼の説明を聽いたのであつたが、しかも尙、彼の證示は充分に私を納得せしめなかつたこと、私には彼の悲劇よりも、ゲルトナー座でライムンド（Raimund）の魔術戯曲(ヴァウバースチュフク)の好き上演を見る方が好ましいこと、及び私は劇に關する彼の詳細なる説明を悉く評價し且

つ理解するためには、劇場と戯曲の技巧とについて、私に缺如してゐるやうな知識を有つてゐなければならぬといふこと、是等の事を正直に自白せぬ譯には行かなかつた。最後に私は、批評の眼鏡を自宅へ殘して來た時にはいつも最もよく芝居を樂むことが出來るといふことを自白したのであつた。書物――哲學書ですら――をも亦私はこの醜惡な道具(インストルメント)を用ゐずして讀むのを最も好むのである。その時ちやうど傍に立つてゐたパウル・ハイゼは――それはミュンヘンのミヒャエル・ベルナイスの宅における或る會合の席であつた――極めて嚴肅なる、殆ど悲しげなる調子を以て次のやうに言つた。それが尙ほ出來るといふことを貴君(あなた)は喜んでゐらつしやい。私も出來ればさうありたいと願つてゐるのです！　と――ハイゼの如き靈才ある人且つ偉大なる藝術家の口から出たこの一語は人をして多くを考へしめる！　私はその時何を考へたか又それについて今何を考へてゐるか？……少しも考へず、たゞ觀照し、驚歎し、感謝しまた崇拜する者は幸福である、と、かう私は考へたのである。

私には滅多に例の無いことであるが、此間の朝目醒めた時には妙に睡眠の效もなく少しもすがすがしい氣持になれなかつた。必しも病氣といふ程ではなかつたけれども、肉體的にも精神的にも私は一種の懈怠を感じた。頭は空虛であり、考へることにも又は書くことにも、すべて自己活動には全然氣が向かなかつた。それで私は自ら强ひて漸く例の仕事を始めて見たが、その結果は惡るかつた、さうしてやつと書けたのは二行にも足るか足らずであつた。外部からの刺戟が必要であつた、そこで私は——全く私の習慣に反して——ちやうど一番手近に在つた書物の中から、或は是を或は彼を取り上げた、これは勿論何か一つの思想を漁り出して、それに取り著くため且つ堪へ難き凝滯（Torpor）の狀態を脫せんがためであつた。考へるとは、自分自身と對話を爲すことである。思惟が行詰るのは、「會話」が旨く進行しないといふ徵である、そこで人は、自らこの窮地を脫せんが爲に、「會話辭彙」 „Konversationslexikon“〔獨逸の百科辭典のこと〕を當てもなく開くのである。

„Konversations-Lexikon heisst's mit Recht,

Weil, wenn die Konversation ist schlecht,
Jedermann
Zur Konversation es nutzen kann.“

「會話辭彙と呼ばるゝは宜なり、
會話が旨く進まぬとき、
何人も
そを會話のために利用し得ればなり。」

このゲーテの格言が不圖頭に浮んで來た。尤も私は會話辭彙なるものを持つてゐない、けれども別に一定の事項を調べる積でもなくまた精神の元氣を恢復するために單に少し許りの食物を求めるに過ぎないやうな場合には、樣々の他の書物でも容易に、否一層よく會話辭彙の代理を勤めることも出來る、不活潑なる思惟に衝擊を與へ、さうしてそれを呼び醒まして再び活動せしむるに最も適切なるは、格言や、箴言や、斷想や、其他總じて手短

かに、簡淨且つ單純に言ひ表はされたる思想である。——私は態々立つて行つて長く幾多の書物の中を搔き搜す必要も無かつた、——又その朝はそれをする元氣すら無かつたのであつた。私の要したものは私の机や椅子の傍の床の上に在つた樣々の書籍やノートの中に見出すことが出來た、私は唯そちらへ手を伸しさへすればよかつた。そこにはゲーテの格言集や、リヒテンベルヒ（Lichtenberg）の論文集や、アミエルの「日記」（Amiel, Journal intime）や、ヒルティーの「書簡集」や、リュッケルト　やまた古い、なほ私のハイデルベルヒ並にミュンヘン時代に屬する、備忘や極めて多種類の、その一部分は可成り稀有の著書からの拔萃やを書き込んだ數々の冊子などが在つた。バルテルス（Bartels）の獨逸文學史も亦すぐ手近に在つた。そこで私がめくりはじめたこの「會話辭彙」は私に活氣を付けまた仕事慾を起させ、さうして再び私の心をわが好意ある讀者と私との間の前回の閑談の主題であつたところの讀書や書物やまた文學上に於ける私の同情（好尙）等の方面に導いてくれた。

學問上並に文學上のあらゆる正直な教師と助言者とを殆ど毎日のやうに當惑せしむるものは、「人」（man 各人）は一體何を讀むべきか、といふ質問である。惟ふに之に對しては何等の答も無いのである、それは恰も「人」は何を爲すべきか、なる問の場合と同樣である。ヒルティーは極めて正當にも、「眞誠の（即ち精神的）生活に於ては「人」なるものは存在しない」と言つて居る。この場合提出し得るはただ「余」は何を爲すべきか又は讀むべきかといふ質問だけである。又これに對する答は時によれば與へることも出來る、けれども無論絕對的、普遍妥當的、無條件的意味に於てゞはない。讀物に關しては、「ねばならぬ」（muss）とか「べきである」（soll）とかいふ强制が意味を有するのはただ學校に於てのみであり、しかも其處に於てすらも獨り下級においてのみである、また上級に於ては、ホメロス、古代詩人の作品の一部、諸々の古代史書や、哲學者や、演說家や其他の如き苟も敎養ある人士の必ず讀んでゐなければならない樣な一定の、少數の作家に關する場合のみである。その故は旣に學生時代に於て是等の美しき著作を讀まないやうな人は、多分後年

――一たび近代生活の渦卷と焦躁との中に引込まれた曉――にはもはやさういふものを手にする機會などは頗る見出し難いからである、――尤も言語學を自分の專攻科目として選ぶとか、もしくは世を隔てたる學究的生活を送らうと決心する如き場合は別であるが、――しかもかくの如き生活といへども猶今日では、到る處に勢を逞うせる不安靜に對して常に人間を護つてくれるといふ譯には行かない。

各人はそれ故に專ら自分の要するもの自分の個人的精神的需要並に傾向に適應するものを研究し且つ讀むべきである。他人が自分とその興味を同うしようと、又は自分の見解や、努力するところや仕事をば無用、「時代後れ」且つ「時代外れ」と宣し、微笑を以てこれを迎へようとも、そんな事を氣にしてはならない。學問上の研究と讀書とには、また我等が我等の研究において、自らそれを正しいと且つ我等の個性に適合せるものと認識したるが故に、採つたところの途を固執するには、啻に勤勉と善き意志とのみならず、更にまた研究事項に對する偶の愛好と牢乎たる性格とが必要である。自己の研究に對する――また教

師に對する！――敬愛の念なくしては、決して永く頭に殘るやうなものを學ぶことが出來ない。多大の勉强の結果やつと學び得た事ですらも人は寧ろ直ちに且つ喜んで忘れるのである。それは、言はゞ、胃の腑に殘れる嘔氣を催さしむる食物の如くに、吐き出してしまふのである。これは我々皆が學校時代から知つてゐる事である。想へば我々は其處では實に何から何まで學ばなければならなかつたことであらう！　誰か、その時代の事を、また例へば古典語や數學のために費したる正直な勞苦を一種の感慨を以て回顧せぬ者があらう、しかも戰慄をもまた嫌厭をも惑ぜずして是等の時間を回想し得る人は果して多く在るであらうか。少くとも私は是等の幸福なる者の中には這入らない。――愛好と牢乎たる性格とがそれに加勢し、その繭の甲を裂き破つてその内に潛在せるものを活動力に轉化せしめないならば、善き意志もしくは好き意圖だけでは未だ多く爲されたとは言へぬ。實行されずにゐる好き意圖や、企畫や、決意は、人の知る如く、これ正に、地獄へ通ずる道の鋪石として用ゐられたる石である。企圖の成就を保證するものは唯だ奉仕するところの事業

に對する忠信あるのみである、忠信を保證するものは唯だ愛好あるのみである、愛好と忠信とこの兩者を保證するものはただ牢乎たる性格あるのみである。我等を自由にし、我らが學問や藝術の世界における滔々たる時代の流行に影響せられて盲目的にこれに陷ることを防いでくれる者も、また我等をして、たゞ同時代の人々がその中に泳いでゐるのを見るといふだけの理由で、自らもその流れに飛び込むが如きことなからしむるものも、これ亦性格である。性格なるものは、更に又、人を護つて、その精力の分散と浪費との弊に陷らざらしめ、自己を集中し、局限し、さうして特にあらゆる不必要なるもの、餘計なるもの——それ自體に於ては重要であり且つ興味あるものですらも——をば自分から遠ざけ、それをば永久に斷然諦めることを能くせしむるものである。諦念（Entsagung）は學問研究に於ても亦練習さるゝを要する。これは人の思ふほどに容易なものではない、年若き時代には殊に困難である、また天禀が大なれば大なるほど且つ多方面なれば多方面なる程いよ〳〵益々困難となる。しかも猶、その學問上乃至藝術上の不規則なる欲求（Gelüste）を局限せ

ずしては、また價値多くして好きものではあるが、しかも我等の本來の生活目的とは關係の遠いものに對する屢々非常な苦痛を感ぜしむる斷念（Resignation）なくしては、何人も今の時代に於ては何等言ふに足る程の事を成就し得ぬであらう。——何事に於てもさうであるが、我等は讀書や學習においても亦結末を附けることを解しなければならない。それは即ち、「それに向ける時間が最早無いといふやうなものは、少しもこれを學ばうとも讀まうとも欲しないことである。しかしこの眞理は我等が老齢に達するに及んで始めて全然明瞭となるものである、」蓋し老齢に於ては、それの爭ふべからざることは日毎の經驗によつて、即ち自己の精力が漸く消失し、生もまた愈々傾いて來たといふ感じによつて、今や手を以て掴み得るほど明瞭に證示されるが故である。加之、自然そのものも亦來つて人間を幇助し、彼のために斷念といふことを容易ならしめる。「年若き時代にはそれ無くしては到底生きて行かれさうにも思はれなかつたやうな、樣々のものに對する興味も段々消失するのである。」彼は成るほど己が精神上の營養にはもはや何等の新しい材料をも要しない、け

れどもその代りに、從前の材料の中から一層念入りの選擇をする、さうして己が現狀に適切なるものゝみを攝取する。彼のそれ等のものを評價する標準も亦變つて來る。青年及び壯年時代には澤山一緒に嚥下し且つ能くそれに堪へることの出來たものも、今はもう元程の量では厭氣を催さしめる、曾ては殆ど振り向きもしなかつたものは、今や彼の日毎のパンとなる。——

× × ×

まだ私の歐羅巴にゐた頃にも、年下の友人たちは屢々私に向つて、私が、彼等の驚嘆し且つ私に勸めたところの、(且つ以前ならば私もまた多分讀んだであらう如き)或種の著作を讀まうと欲しなかつたのを批難した。然るに私がそれ等を讀まうとしなかつたのは、その題目がもう私の興味を惹くに足らなかつた爲か、もしくは私がそれに就いて既に他の、大抵は前代の、否、極めて古い時代の作者から充分に敎へられてゐたからである。新しきもの若しくは(更に正確に言へば)所謂「近代的なるもの」に對するかくの如き强情、及

びもう疾つくに解決のついてゐる事柄——諸々の說や、疑問や、問題など——を繰返して嚙むことに對する嫌厭の情は、老齡に至つて消失しないのみか、寧ろ增して來るのである。蓋しこれは、年と共に益々深く己が中に沒入し、自らを外界から隔離し、よつて以て愈々自足的(selbstgenügsam)となり且つ一面的となるところの、變り來れる我等の精神狀態の自然な精神的生理的結果に外ならない。我等を驅つてこの一面性に傾かしめ、さうして我等をして嘗ては大なる價値ありと認めゐたる多くのものに對して無頓著ならしむるものは、これ實に自然そのものである。——

今から三十年も前には私は、古風なるものに向ふ私の同情(好尙)と、所謂「時事問題」及び日日の出來事に對して餘り興味を持たないこととの爲に受けた批難に對して實のところまだ、次に引用せんとするゲーテの詞を以て對へる資格が無かつたのであるが、七十二歲になつた今日では、それをば充分正當なる理由を以て——しかもそれは私に大なる安心を與へるものであるが——自分の上に適用することが出來る、のみならずその詞は私の本

性上の幾多の「風變りの點」(Wunderlichkeit)を說明するものである。然るにこの所謂「風變りの點」たる、當地に於ける私の知人の大多數の全然理解せざる、しかも、彼等の少からず自ら誇とせる人間に關する知識と世間的經驗とが斯程までに狹隘でなかつたならば、極めて容易に了解するであらうところのものである。彼等の常に相接し相交はつて來たのは、ただ彼等の境界に屬し、彼等と同じ傾向及び興味を有し、彼等の如き生き方や考へ方をなし、彼等と同じ教育や教養を經來れる人々のみである、且また彼等は自分達とは違つた社會階級に屬する如きまた自分達とは違つた生活目的を有する如き人々をば未だ曾て顧念しなかつた、否、察する所さういふ人々を全く見たことが無いのである。かくて彼等は極めて平凡な事でも、それが自分等の世界に屬せずまた適合し得ないものだと見るや否や、直ちにそれを呼ぶに變妙だとか、奇異だとか、また「風變り」だとかいふ語を以てする。彼等の社會以外には何處にも通用しないやうな、かつ彼等が愚かしくも守るところの背理を極めたる外的な形式や、規則やまた法則にはづれる事は一々すべて——如何に些細な事で

あつても——彼等を喫驚せしめ、彼等をして憤慨に堪へざらしめるのである。否、それは不自然、殆ど「國家に災する虛無主義的」のものとさへ彼等には見える。かくの如き人々との交際は私にはうるさい、それは私が、自分では「奇人」(Sonderling)も何でもなく、むしろ自分の如き者はすべての文明國民の間に大勢在るといふことを充分に、最も明瞭に意識して居りながら、しかも人から「奇人扱にされ、根掘り葉掘り質問をかけられ、凝視され、驚の眼を以て見られ、又更に甚だしきは「驚歎」されなどすることを好まざるが故である。——

さていよ〳〵ゲーテの格言を引くのであるが、これは極めて多樣なる方面に適用することが出來る、我等はただ「書物」と「讀む」といふ語の代りに他の語を置けばよいのである。

„Warum magst du gewisse Schriften nicht lesen?“
Das ist auch sonst meine Speise gewesen;
Eilt aber die Raupe, sich einzuspinnen,

Nicht kann sie mehr Blättern Geschmack abgewinnen.“ Sprüche in Reimen.

『「汝は何とて或種の書を讀まんとは欲せざるや。」

そは嘗てはまたわが糧(かて)にてもありき。

さはれ繭造るに忙しくなれば、

蝓蛉(あをむし)はもはや葉味ふ能はざるなり。』

私が「繭を造り」始めてからはもう可成り長くなる、さうして私にはこの狀態が極めて快適であるから、私は別に蝓蛉の境遇を羨ましいとも思はない。また惟ふに今の私に適する食物は、なほ葉を食つて活きてゐる者の口にも同樣に能く合ふであらう。兎に角それの方が一層單純である。しかもそれが彼を滿足せしめぬことあらば、彼は何時でも再び元の「葉の」方へ復歸することが出來るのである。

× × ×

寸陰をも惜むやうにと我等に注意を促してくれるものは、老齡に於ては自然であり、若

年時代に於ては理性である。我等は Qui trop embrasse, mal etreint（餘りに多くを抱かんとする者は却つて抱き損ふ）なる旨言（これには勿論私自身も必しも常に從つたといふわけではなく、又それが爲に多大の損をしたのであるが）を想起して、我等の努力と仕事とに限界を附することを忘れてはならぬ。汝の個性に適し、且つ汝が充分なる熟慮と、自省とまた己が有する諸力の評價との結果、自ら選定したる目的にかなふところのものゝみに携はれ。學問や文學における選り食ひ（Naschen）や、模索し廻ること（Herumtasten）や、搔き搜し（Kramen）や、また何か一定のものを求めるのでもなくして、もしくは唯だ備忘錄の中へ少しでも多く書拔をしようとの目的のみを以て、歷史の隅々までも隈なく搜すといふやうな事も、一時は慥に面白くもあり又世人の眼には學者らしい研究振とさへ見えるかも知れない、けれどもその實大抵「研究家」に確乎たる志操と性格との甚しく缺如せることと及び彼の頭腦の中は無秩序にして住み難いとの觀を呈せることを證示する所のかの sitzenma inertia（多忙なる安逸）に過ぎない。然るにこの無秩序といふことは精神的生活にお

いても、物質的生活に於けると同様に、危險なものである。――此程アミエルの「日記」(Amiel, Journal intime) をめくつてゐた際、私はこの眞理が恰も殆ど全く私自身の心の底から發せられたとも謂ふべき詞を以て、非常に見事に言ひ表はされて居るのを見出した。

「結末をつけ得るといふこと、これ何たる大きい術(クンスト)であらう！　それは即ち決斷力ある、考量と確乎たる判斷を下すの能ある人々の有する限なく貴き能力である。結末を附け得るとは、自ら解く能はざるものをば敢て切斷するの勇氣と大膽とがあるといふことである。更に又それは眼をただ本質的なるものゝ上にのみ注ぎ、さうしてそれに附纏へる一切の餘事及び一切の小事と瑣末事とをば――それ自體に於ては恐らく興味ある如きものであつても――恰も殼の如くに、本質から剝ぎ取りさうして爾後全然これを顧慮しないとの意味である、蓋しかくするは、同時に多くの事に携はるも、それは竟に何物をも成就せしむる所以でなく、且また一擧にして一切を見渡しまた探究するといふが如きは到底不可能なるが故である。之を要するに、それは我等の生活と、我等の有する諸々の義務と諸々の仕事と

を單純化するの術である。結末をつけ得るとは、「出發」の準備を整へてゐるといふこと、一切を完成し、我等の自由の障碍となるの處あるものは總て己が背後に棄ておいた、との謂である。それは畢竟自由なる人として從容死に就くの術に外ならない。――我等の生活を檢するに、如何に多くの邪魔物を我等が曳きずり廻つてゐるかは、實に驚くべきものである。それは即ち我等が愚かにも自ら負ひたる重荷や、義務とも稱すべからざる義務や、習癖や、實行し難き計畫と希望や、濫りに企てられたる仕事や、立案や、また成るほどたゞ我らの忘想の中においては價値と意義とを有するも、その實最大多數の場合に於ては我等の自由を破壞せずにはゐないやうな幾多の事柄の雜然たる集合などである。今日の無秩序は明日の牢獄！ (Unordentlich heute, in Fesseln morgen!) 秩序なる哉！　人生におけ る、物質的、精神的、道義的生活に於ける秩序！　何たる力(パワー)、何たる支柱、何たる節約ぞや！秩序とは自ら欲するところ、自ら爲すところ、自ら往く處を知るの謂である、それは愼重であり、目的活動であり、理性であり、光であり、平和であり、內面的自由であり、自己

決定の能力である、それは美的並に道德的美であり、「幸福」であつて、——これ實に萬人の求めてゐる所の唯一のものである。——總じて依屬の狀態に在るは一種の不幸である。余にとつては實に堪へ難き觀念(ゲダンケ)(考)である。然るに自己の犯した罪により、不規則なる生活により、もはや取返しのつかぬ過誤により自ら依屬の境地に墮するといふに至つては、これ正に自ら己が自由を拋棄し、己が希望と、己が睡眠と及び己が幸福とを殺害する所以である。それは實に地獄である！」私が玆に引用したのは逐語譯ではない。私はアミエルの思想を極めて自由に再現しさうして內容から見れば類緣ある、彼の「日記」に於てはしかし遠く相隔離せる三つの箇處を一括して譯出したのである。

× × ×

勞作したり、讀書したり又研究したりする術(クンスト)に於ては、勇氣(ムート)が、一種の勇士的精神(ヒロイズム)が重大なる役割を演ずる。それは即ち對象に附纏ふところのあらゆる困難を物ともせず、敢然として着手すること、しかしまた、到底他にその困難に打勝つべき途なきこと、あらゆる

我等の努力と最も勤勉なる探究とを以てして尙且つ何等見るべき成績を擧げ得ざることを洞觀するや否や、斷然、「結目(クノーテン)」を切斷するの勇あることである。Trancher la difficulte, trancher la question, trancher court（困難を切斷すること、疑問を切斷すること、手短に切斷すること）、是等は極めて良き詞である！ それは自ら何等の不必要なる困難をも造らざること、それの無い處には決してそれを看取せざること、Chercher mibi a quatorze heurs（在りもしない困難を索めざること）、毫も問題とするに足らざる、もしくはもう疾つくに解決されたる、もしくは態々頭を惱ますの價値なき、もしくは各人が獨り自己の爲にのみ、全然個性的に、純粹に個人的に解決すべき、決して他人に代つて答へてやることの出來ない、もしくは最後に、現世に於ては人間的理性に對し總じていつ迄も幽暗なるものとして封じ置かるゝの外なきが如き一切の所謂疑問や、問題をば手短に片附けることである。——

宗教と倫理とに關する問題の極めて大部分は最後の二範疇に屬する、之に反して哲學、歷史及言語學は極めて屢々最初の三範疇に屬する問題で頭を痛めるのである。——私は例

へば、プラトンの對話篇の著作年代順と眞實とを確定することを以て果して眞面目にまた心から重大問題と感じた如き學者が曾て在つたか何うかを知りたいと思ふ！　もしくは、カントの觀念論は「純粹理性批判」の第一版と第二版との中その何れに從つて評價されねばならぬか、との問題の如きである。この觀念論は總じて何等かの眞理を含んでゐるか、又それは本來如何に解せらるべきであるか。之に關しては既に一つの立派な圖書館が出來るほど夥しく書かれた、しかもこの不幸なる「問題」は今なほ相變らず論議せられ且つ哲學上非常に重要にして極めて近代的なる問題と目されてゐる。然るにリヒテンベルヒは之に對して既に百年以上も前に僅少の詞を以て、私の觀るところでは決定的解答を與へてゐるのである。して見れば、哲學史を書く積りもなければ又カントに關する學位論文を草するの意もなく、また總じて學者となるよりも寧ろ單に教養ある人たらんと欲し且つ「觀念論」の何を意味するやを知らんと欲する如き年若き讀者は、敢て自ら多大の苦惱を甘受して、幾千の多きに達する無味乾燥なるカント哲學の叙述に隈なく目を通すべきか、それと

もリヒテンベルヒの與へたる極めて分明にして何人にも理解し易き説明を以て滿足すべきであるか。少くとも私は彼に勸告するに最後の途を取ることを以てするであらう。それで讀者諸君は、私の言ふところが果して正當であるか、また凡そ認識論上の觀念論の本質を、ば、リヒテンベルヒの試みたよりも更に短簡に、更に單純に、更に易解に――殆ど「通俗的」にと言ひたい程に――説明することは果して可能であるかを直ちに自ら判斷するが好い。彼は即ち言ふ。「眞摯なる考察は人をして觀念論の打勝ち難き强味を感知せしめるそれには我等は唯、もし我等の外に對象が存在するとしても、しかも我等はその客觀的實在性については絶對に何物をも知り得ざる所以に想到するを要するのみである。兎にも角にも我等はやつばりたゞ觀念論者であり且つ何時までもさうであらう、否、我等は絶對にかくあるより他に途が無いのである。何となれば一切は獨り我等の觀念(表象)によりてのみ我等に與へられ得るが故である。是等の觀念及び感覺が外的對象によつて生起せしめられたと信ずることも、これ亦一個の觀念である。觀念論を反駁することは全然不可能であ

る、何となれば我等の外なる對象の存在を想定した場合といへども、我等はなほ依然として觀念論者であるであらう――是等の對象について何かを知り得るといふことは、我等にとつては不可能なるが故に――からである。……「外界の對象を認識すると言ふは一種の矛盾である、己の外に出ることは人間には不可能である。對象を見てゐると信ずる場合にも、我等はたゞ自分を見てゐる過ぎない。實を言へば我等は、我等自身と我等の内に生起するところの變化と以外には、世界における何物についても毫も認識する所はあり得ぬのである。」――「己が内に何かゞ生起しつゝあると我等が信じてゐる場合とちやうど同じ程度の確實感を以て、我等は或事が我等の外に生起しつゝあると信じてゐる。然るに内とか外とかいふ語は我等の極めて能く領解する所である。この區別を感知せざる如き人は世界に一人も無いであらう、亦さういふ人は多分今後生れて來ることも無からう。しかも哲學にとつてはそれで充分なのである、哲學は元來これ以外に逸出してはならない筈である、蓋しそれはすべて無用の勞力と時間の浪費とに終るものである。何故ならば縱令物が如何なる

ものであらうとも、しかも我等はそれについて我等の觀念内に在るところのもの以外の何者をも絶對に知らぬといふことは、既に充分確定せるところだからである。此見地よりすれば――余はこれを正しいと信ずるのであるが――物が果して實際我等の外に存在するか、又それが果して我等の見てゐる通りの形において存在してゐるか、の問題は誠に毫も意味をなさぬものと謂ふべきである。一度で充分なる、また必ず充分でなければならぬ（蓋しそれはこの場合には、我等の觀念からその原因に達すべき何等の橋も存在しないからである）如き時にも、人間は飽迄も物を二度手にしようとするが（卽ち此處では、一方に於ては我等の觀念として、他方に於ては物自體として）、これは不思議なことではないか。原因無くして物が存在し得るといふことは、我等の考へ得ざるところである、が、しかしこの必然性は一體何處に在るのであるか。我等が自己の外に出ることの全然不可能なる所以を想へば、それもまた我等の内になければならぬ。――人がこれを呼ぶに觀念論を以てせんと欲するや否やは、余にとつては實際あまり重要な事ではない、名稱などは何うでもよいのであるから。それは少くとも、自分の外に

物(ディン)が存在すること、及び一切事物には原因が在ることを觀念論によつて認識するところの觀念論である。さらば人は此上更に何が欲しいと云ふのか。人間にとつては、少くとも哲學的人間にとつては、何等他の（上述の觀念論以外の）學は存しない。平俗的生活に於ては人は（當然のことであるが）安んじて一段低き處に立脚してゐる。しかも余は充分固く信じてゐる、我等は是等の問題に關するあらゆる哲學的考察を全然拋棄するか、もしくはかく（上述）の如くに哲學的思索を爲すか、二者その一を選ばねばならぬ、と。かく論じ來れば、空間及び時間を以て直觀の單なる形式と做したカント氏の說の極めて正當なる事は、容易に觀取する事が出來る。蓋しかく說くより外に途は在り得ないのである。」(Lich tenberg, Ausgew. Schriften. Reclams U-B. Nr. 1286-1289 S. 63 f. 64.75 f. Vgl. S. 72.73).

讀者諸君はどう思ふか。カントの觀念論をより好く、より簡短に且つより單純に說明することは出來るか、又リヒテンベルヒの明晰なる說明が既に存在してゐるのに、猶も、彼の說きし以外の事は毫も含まれてゐる筈のないやうな、この題目に關する大部の諸論述を

讀んで、果してその勞は酬いられるであらうか。

× × ×

「プラグマティズム」(實用主義)についてかくも非常なる熱心を以てかくも多く語られたり書かれたりするといふことも亦、私の解するに苦しむところである。その意味、その意義及び眞理性に關しては、プラグマティズムは「觀念論」ほどにも「問題」にならない！各人は人として「實用主義者」である。彼はかくあるより外に途が無いのである。彼がかくあらざるを得ぬのは、誰人も己が生活、己が行爲及び活動のために要する所のもの、それ無くしては生活し得ぬもの、彼の生活並に幸福の不可缺條件 (conditio sine qua non) たるものゝみを信じ、眞理と做すが故である。私の（行爲(プラグマ)）の全體を規定してゐる所の私の（信條(ドグマ)）、即ち私の世界並に人生觀は、竟にプラグマティツクたるより外はない。何れの哲學もまた何れの宗敎も必然的に「プラグマティズム」である、何れの藝術家も亦「プラグマティスト」として製作する。――ルードヴイツヒ、シュタイン (L. Stein, Philos. Strom

gg. der Gegenwart. Stuttg. 1908. S. 33.75) はその「プラグマティズム」を論ずる章のモットーとして Was fruchtbar ist, allein ist wahr (「眞なるはたゞ實りよきものゝみなり」) といふゲーテの句を引いてゐる。このモットーを選んだのは極めて當を得てゐる、けれどもそれはプラグマティズムの哲學的內容について言ひ得るところの一切をば既に說き盡してゐる、從つてこの「運動」の叙述は總て安んじて省略し得る譯である。興味を感ぜしめ得るは高々この哲學の歷史的方面位のものである。また各人は己に役立つもの、自らその「果實」を見さうとして受用する所のものゝみを眞理と做し且つ信ぜよ、といふが如き貧弱なる思想が、——かくの如き平凡(プラチチユード)な考が、かくも卑近な眞理が一つの哲學の中心思想となり、學派を起し、人心を呼び醒まし且つ人をして筆を執るに至らしめるといふ事はこれ實に最近數十年間の哲學的精神が己のために提示したところの、貧弱の徵證に過ぎない。——加之、何故にプラグマティズムが實證論的學派の中に數へらるべきかといふことも私には謎である。ところが若し、獨りそれのみを私が必要とし、獨りそれのみを私が事缺き

得ざる如き私にとつて「實りよきもの」、從つて唯一の眞なるものが、プラトン的唯心論、もしくは基督の宗教、もしくは唯物論であるとしたならば、如何？ 其時はどうなるか。その場合には私は成程やつぱり「プラグマテイスト」ではあらう（何故なら私は既に本來さうなのであるから）、が、しかし「實證論者(ポジティヴィスト)」ではなく、寧ろプラトン主義者、基督者、もしくは唯物論者と呼ばるべきである！ 私は「プラグマティズム」の信奉者として更に何か外の者でもあり得るのであらう。何れの世界觀も、それが生れながらの「プラグマテイスト」としての人間の精神內に生起する、從つてプラグマティズムをその前提となし、プラグマティズムから發生する限りにおいては、必やまた同時にプラグマティズムでもなければならぬ。——上に引用したる格言に於ては、ゲーテは單にプラグマティズムの一般思想と傾向とを一句に壓搾したに過ぎないが、宗教に關する、取分け(心靈の)不死に關するその數多き言說に於ては、この忌はしき語を用ゐずして、彼の自ら「プラグマテイスト」として是等の問題に對してゐることが極めて明かに看取せられる。これには一例を擧ぐれ

ば充分であらうと思ふ。

„Du hast Unsterblichkeit im Sinn;
Kannst du mir deine Gründe nennen?“
Gar wohl! der Hauptgrund liegt darin,
Dass wir sie nicht entbehren können.“

「(爾は不死を信じ居れり、
その理由を擧げ得るや。)
そは容易なり― 主たる理由は
我等がそを缺き得ざるに在り。」

Zahme Xenien. III.

胡麻

三、胡麻

ラスキン

諸王の寶庫に就いて

「汝等すべてに胡麻の菜子を與へん――而して十磅と。」　ルーシアン

一　皆さん、「諸王の寶庫に就いて」と云ふ演題で、一體何を話すのだらうと御不審に思はれるでせうが、段々説明致しますから、暫く御辛棒をお願ひ致します。實は、私は支配者としての諸々の君主のお話をしようとする心算はなく、富を藏めてゐると思はれる寶庫について話さうとしてゐるのでもありません。私のお話ししようと思ふ君主と寶庫とは、普通に考へられてゐるものとは、全く趣を異にしたものであります。(友人を自分の好きな景

色を見に連れてゆく時に、よくやることですが)、暫く皆さんの御注意をお預り致しまして、不完全ながら出來るだけ工夫して、ぐる〳〵と曲りくねつた路を通り、不意に美くしい風景の見える所に來るまでは、見せたいと思ふものを隱しておかうと思つてゐたのでありますが、一方では、聽衆に話の糸口を示さない話手の話を聞かうとする程、疲れることはないと講演に慣れた人達が云ふのを聞いたこともありますので、私は薄い覆ひを直ちに取除いて申しますが、「書物の中に隱されてゐる寶と、それを見出す方法と、見失ふ道と」に就いて、皆さんに話さうとしてゐるのであります。大變大きな問題だ、と皆さんはおつしやるでせう。成程大きな問題ですから、角から角までに觸れるわけには行きません。唯、私は讀書に就いて二三の簡單な考へを、皆さんにお話ししようと思つてゐるのです。教育が日に日に廣まつて行くにつれて、人々の考へも變り、それと共に、文藝が社會の各層に、益々廣く行き亘るのを見る時に、その簡單な考へが、私の頭にこびりついて離れないのであります。

二　偶然にも私は、色々の階級の青年の爲の、幾つかの學校に關係して居りますので、親達から子供の教育に就いて、多くの手紙を貰ひます。その多くの手紙を讀んで見ますと「人生に於ける地位」と云ふ考へを親達が――特に母親達が――持つてゐるのに氣がつきます。「人生に於ける是々の地位に相應しい教育」――此れが常に定り文句で、此れが目的であります。私の知つてゐる範圍内でも、親達は眞に善い教育を求めないやうです。訓育上の抽象的な正義の概念でさへ、作者達に依つて減多に取り扱はれないやうであります。「私の息子に立派な上衣を着せるやうな教育、息子が二つ呼鈴を備へつけてある戸口で、自信のある態度で訪問者用の呼鈴を鳴らすことが出來るやうにする教育、そして結局は、自分の家にも二つの呼鈴を備へつけるやうに導くやうな教育、一言で言ひますと、人生に於いて榮達に導く教育。此れを私達は平身低頭して願ふので――私達の願ひと云へば唯此れのみです。」人生の榮達そのものを願ふ教育――死しても尙榮達である他の教育がある、と云ふことは兩親は考へないやうであります。尙、此の本質的な教育は、正しい方法で始めるな

らば、間違つた教育よりも容易に出來るものであると云ふことも、親達は考へないやうでありますが。然し又、間違つた方法で始めるならば、如何なる價を拂つても、如何なる助力があつても、成就出來るものではありません。

三 最も忙しい此の國の人々の間に、廣く行き亘つてゐて、誰でも考へる事柄の中で、特に「立身出世」すると云ふ考へは、はつきりと述べられても來ましたし、青年の努力を刺戟する爲には、大變適當なものであると云はれてゐますが、一體「立身出世」とは何の事であるのか皆さんと共に考へて見ませう。實際上では「立身出世」するとは世の中で有名になることであります。即ち、人々から尊敬されたり、立派だと思はれたりする地位を得ることであります。一般に「立身出世」とは單に金持になることではなくて、あの人は金持だと思はれることであり、或ひは何か大きな仕事を成し遂げることではなくて、あの人は大きな仕事を成し遂げたと思はれることであります。一言で言ひますと、稱讃して欲しいと云ふ望を滿すことであります。高潔な人々も、最後には此の望を持つて、失敗するも

のだと言はれてゐますが、凡人は始めから此の望を持つてゐるやうです。大體に於きまして、人間を刺戟し、大いに努力させるのには、今迄も此の望が基になつてゐたのであります。丁度人間の破滅が、快樂を愛する心より起つて來たのと同じであります。

四 私は此の刺戟を辯護しようとも、攻擊しようとも致しませんが、それが如何に努力の基になつてゐたか、特に現代に於きまして、努力の基になつてゐるかを、皆さんに考へて頂きたいと思ふのであります。

私達の努力を刺戟し、休息してゐる時の慰めとなるものは、虛榮心を滿たすことであります。これは人生に密接な關係を持つて居りますので、虛榮心を傷けることは致命的であると云はれてゐますが、成程さうだと思はれます。脫疽にかゝつて快癒の見込のない身體に就いて「懊惱」と云ふ言葉を使ひますが、それと同じやうに、虛榮心を傷つけられた時には「忿懣」と云ふ言葉を使ひます。〔譯者註、懊惱と忿懣とは英語では同じ字で表してある〕それで、私達の中には、虛榮心が健康と精力とに及ぼす種々の影響を、認められる人

も少しはあるでせうが、普通一般の人々も、それが自分の動機となり、導く力であることを知つてゐるだらうと思ひます。水夫は、船中の他の何れの水夫よりも、巧く船を操ることが出來ると思ふので船長に成りたいと望むのではなくて、「船長」と呼ばれたいので、船長にならうと思ふのです。僧侶は、自分以外の誰がやつて見ても、自分程健實に、困難の中にある教區を導いて行くことは出來ないと信ずるが故に、僧正にして欲しいと願ふのではなくて、第一に「お上人樣」と呼ばれたいために、僧正になりたいと思ふのです。君主は、他の如何なる人が君主と成つても、自分程立派に國家に盡すことが出來るものではないと信ずるが故に、領地を廣めたり、臣民を增やしたりしようと望むのではなくて、唯々出來るだけ多くの人々から「陛下」と呼び掛けられたいので、領地を廣めたり、臣民を增やしたりするのであります。

五　「立身出世」についての私の考へは上に述べました通りであります。誰でも「出世する」と云ふ時には、出世の結果として起る「上流社會に入る」ことを云ふのであります。

上流社會に入りたいと望むにしても、上流社會の人々と交際したいためではなくて、上流社會の人々の中に立ち交つてゐるのを、人に見て貰ひたいからです。そこで、上流社會を好いと考へるのは、さう云ふ社會に交ることが人眼に付くからであります。

此處で暫くの間話を止めまして、皆さんに失禮な質問をして見ませう。私に贊成であるか、反對であるかゞわからないと、話を續けることが出來ません。先づ皆さんの立場を知らねばなりません。で私は、皆さんが「お前は人間の行爲の動機を餘り安く見過ぎるぞ」とお考へになつてゐるかどうかを知りたいと思ひます。今夜は私はその動機を出來る限り安つぽいものだと言ふ心算であります。と云ひますのは、私の政治的經濟學に關する著作の中で、以前には「德」と云ひ慣らされてゐた、正直とか寛大とかを、人間の行爲の一動機に數へても宜しいかと云ひますと、人々は次のやうに答へるのです。「君はそれを數に入れてはいけない。それは人間の性質の中にはない。慾心と嫉妬の外に人間が共通に持つものなどは、あらう筈はない。それ以外の感情で、人間に影響を及ぼしたものは一つもない。

あつたにしても、偶然であるか、或は自分に用のない事柄についてゞある。」と。それで今夜は、先づ私は人間の動機を安つぽく見積るのでありますが、それが正しいとお考へになるかどうか知りたいのです。それで、賞讃を求める心が、出世したいと云ふ望の最も強い動機であり、苟しくも義務を盡したいと云ふ考へは、その次の動機であるとお考へになる人は、一寸手を上げて見て下さい。(十數人の人が手を上げた――聽衆の中には講演者が眞面目で云つてゐるのかどうかわからない者もあり、自分の意見を表明するのを恥かしく思つてゐる者もある。)私は眞面目です。本當に皆さんのお考へを知りたいと思つてゐるのです。それでは反對の質問をして、皆さんのお考へを判斷して見ませう。義務が人間の行爲の第一の動機であつて、賞讃を求める心が第二の動機であると、お思ひになる人は手を上げて見て下さい。(講演者の後ろで一人手を上げたと云ふ報告。)よろしい。皆さんが私と同じ意見であり、又私が動機を安つぽく見積り過ぎたのではないことが解りました。却説、此の上質問をして皆さんを困らせることは止めにして申しますが、皆さんは義務が第二の

或ひは第三の動機であると認めてゐられるわけです。何か爲になることをしたいと云ふ望み、本當に利益を得たいと云ふ望みは、第二の動機であると致しましても、大抵の人が出世したいと思ふ時には考へることだと、皆さんはお考へになつてゐるのです。普通の人は、ある程度までは、人に慈善を施す力を得るために、地位と役目とを得たいと望みます。他人に見られようと見られまいと、馬鹿者や無智な人よりも、物分りのよい學識のある人達と交りたいと思ひます。最後に友人が大切であることゝ、友人の影響とについて、云ひ古された理窟をわざわざ繰り返さないでも、自分が幸福になり、世のために役に立つ樣になる機會は、友人が眞實で賢明であればよいと云ふ望みとか、或は友人を選ぶ上での熱心さと、愼重さとの多少とかに、左右されてゐるものだと云ふこともお認めになるでせう。

六 良い友人を選びたいと思つても、扨その決斷力を持つてゐる人は、大變少ないものです。又その選擇の範圍は、大變狹いものです。殆んど全べての私達の交際は、偶然に依るか、必要に依つて定るかの何れかです。それも一つの狹い範圍に限られてゐます。知り合

ひになりたいと思ふ人とは、知り合ひになることが出來ないし、又知つてゐる人達に、最も必要な時に、私達の側に居て貰ふことは出來ません。凡人は高い智識を持つてゐる人々に、ほんの一時的にしか接することが出來ません。運好く大詩人をチラッと見て、その聲を聞くことは出來ます。又は科學者に質問して、機嫌よく答へて貰ふことも出來ます。無理矢理に大臣に十分間だけ會つて貰つて、極くつまらない話をすることも出來ます。又一生の間に一度や二度は、王女樣の御通路に花束を投げたり、女帝陛下のお優しい御一瞥を受ける特權を掴むことも出來ませう。私達は此のやうな瞬間的の機會を望み、或は之にも劣らず、つまらないことを求めて、時間と熱情と精力とを費してゐるのです。一方、私達が何時でも近づくことの出來る社會があります。私達の地位や職業がどんなに低くくても、その社會の人々は、望むが儘に話してくれますし、選びに選んだ言葉で話してくれます。又その信ずることについて話してくれます。此の社會とは、拜聽を許すためにではなくて聽衆を集めるために、質素な飾りつけの狹い控室、即ち、本棚の中で辛棒强く待ち構へて

ゐる、王侯や政治家の群でありますが、大變多く又極めて物優しくて、終日私達の周圍に待たせておくことが出來ますので、私達はさう云ふ人々を何とも思ひません。場合によると、其人達が云ひたいと思つてゐる一言葉にも終日耳を傾けないこともあるのです。

七　私達に進んで話しかけたいと思つてゐる、貴族達との交際に對しては、冷淡な態度を取り、私達を輕蔑し何も教へてくれない人々との交際を求める時に、熱心になる理由は次の通りであります。即ち、現在生きてゐる人々の顏は見ることが出來ますので、私達はその人の言葉などは孰れでもよく、唯顏を見たいと思つてゐるだけなのです。と皆さんは考へになるかも知れませんが、そんなものではありません。たとへ顏を見ることが出來なくても、政治家や君主達の部屋に入り、衝立の後ろに身體をかくし、進み出て顏を見ることを禁じられてゐても、その人々の聲を聞くだけで滿足するでせう。所が、此の衝立が少し小さくなり、四つ折りが二つ折りになり――詰り、本の二枚の表紙の後にかくれて、終日、でたらめの談話ではなく、研究の結果であり、選び拔かれた聖賢の言葉に、耳を傾け

ることが出來るのに、此の謁見所と名譽ある樞密院とを、皆さんは輕蔑してゐるのであります。

八　然し皆さんは、「吾々が聞きたいと思ふ理由は、生きてゐる人間は、今現に起つてゐること、吾々に直接に利害關係のあることを話すからだ。」とおつしやるでせうが、そんな筈はない。生きてゐる人々も、不注意な談話によるよりは、書きものによる方が、時事問題を話すにしても、上手にすることが出來るのです。然し乍ら、皆さんが、落着きのある、後世にまでも殘る書きもの、即ち本當の本よりも、セカセカした其の場限りの書きものゝ方をお好みになる間は、前に述べました動機が、皆さんに影響を及ぼすのは無理もないことです。凡そ本は二つの種類に分けることが出來ます。卽ち、一時的の本と永久的の本とであります。此の區別は、唯性質の上の區別だけではなく、永續きしないのが惡い本で、永續きするのが好い本であるとは限りません。これは種類の上の區別でありまして、一時的の良い本もあれば、永久的の良い本もあります。或ひは又、一時的の惡い本もあれば、

永久的の惡い本もあります。話を進める前に、此の二つの種類の本の定義を述べませう。

九　一時的の良い本と云ふのは、――私は惡い本については話さない積りです――或る人の有益な話とか、愉快な話とかを印刷にしたものでありまして、その人と話を交すには、本を通じてするより他に方法がないやうな場合です。皆さんが知りたいと思はれることについて話すのですから、大變有益で、聰明な友人の話しのやうに愉快なものです。面白い紀行文や、生き生きとして機智に富んだ議論、活氣に滿ち讀者を感動させる小說風の物語り、現代の歷史に直接關係してゐる人々が書いた健實な事實談等です。此等のものは、敎育が擴まるに從つて、數を增して行くものでありまして、現代特有の所產であります。私達は、全く感謝すべきであり、それを利用しないならば、恥とすべきであります。然し又、こんなものばかりを讀んでゐて、本當の書物を讀まないならば、反つて此等を惡用したことになります。その理由は、嚴密にひ言ますと、此等は全く本と呼ばれるべきものではなくて、立派に印刷された手紙とか新聞とかであります。友人の手紙は、今日は面白いも

のであり、必要なものであるかも知れませんが、それを保存する價値があるかどうかは、一考を要することであります。新聞は朝食の時には必要なものでありますが、終日讀んでゐるべきものではありません。同樣に、一冊の本に裝幀されてゐても、宿屋とか、道路とか、昨年の何處其處に於ける天候とか、について書いてある長い手紙とか、面白い話や或る事件の眞相の書いてある手紙とかは、折にふれて參照するのには價値もありませうが、本當の「本」とは云へないし、本當に「讀まれる」とも云はれない。本と云ふのは、もともと話されたことではなくて、書かれた事であります。唯人に傳へるためばかりではなく、永久に殘すために書かれたものであります。話を本にしたものは、著者が一時に數千人の人に話すことが出來ないので、話す代りに印刷にしたものに過ぎません。話すことが出來れば、話したでせう。此の場合、本とは單に音聲を倍加したものに過ぎません。印度にゐる友人に話すことは出來ません。出來ればさうするのですが、出來ないからその代りに手紙を書くのです。この場合は、單に音聲を傳へたのであります。然し乍ら、書物は、單に

音聲を倍加するためとか、傳達するために書かれるのではなくて、音聲を永久に殘すために書かれるのであります。著者は、これこそは眞理であり、有用であり、世のためになるやうな美くしい事であると思つたことを書くのです。著者の知る範圍では、誰もまだそれを言つた者もなく、自分以外の人ではそれを言ふことが出來ないが故に、それを明瞭に調子よく言はねばならないと考へる。調子よく云ふことが出來なくても、兎に角、明瞭に言はねばならない。生れてから今迄に、此れこそは自分が明らかに知つたことであり、捕へることが出來た一片の本當の知識、本當の洞察であると考へるのです。故に、それを永久に書き殘して置きたいと思ひ、出來れば岩にでも彫りつけて置きたいとさへ思ふのです。」此れこそ私の中の最も善い所だ。他は、人々と同樣に食ひ、飲み、眠り、愛し、憎んだ。私の一生は水蒸氣のやうであつた。そしてもう存在しないのだ。然し、此の書いた事こそは、私が目の見、私の心が知つた事だ。私の內に記憶する價値のあるものがあるとすれば、これこそ記憶する價値があるのだ。」と言ひながら。

これが「書いた物」であります。譬へその人が詰らない人間であつても、内に在る靈氣の全てを打ちこんで書いたもので、それは、その人の墓碑銘であり、經典であります。これが「本」と呼ばれる可きものであります。

一〇 皆さんは、そんな風にして書かれた本は今までに無いとお考へになるでせう。それなら今一度お尋ね致しますが、皆さんは、正直とか親切とかゞ、存在するとお考へになりますか。賢い人々は正直でもなく、慈悲心も無いと思ひますか。如何に不幸な人でも、そんな風に考へる人は居ないと思ひます。それですから、賢い人々が心から慈悲の念を以つてしたのなら、その仕事が如何に小さくても、それこそ其の人の書物であり藝術品であります。勿論、大抵のものは悪い斷片が混つてゐるものです。悪い斷片と云ふのは失敗で、餘分で、僞りの作品であります。皆さんの讀方が正しければ、容易に本當の仕事を見附けることが出來ませう。譬へ少くても、此の本當の仕事が本であります。

一一 斯うした種類の本は、凡ゆる時代の偉人達——即ち、大學者とか大政治家とか大思

想家達ですが——の手で書かれたのであります。皆さんは、何れでも好きな本を讀むことが出來ます。然し、人生は短い。皆さんは、今迄にも此の言葉をお聞ききになつたことでせう。それなら、短い人生と、その人生に於いて、出來る仕事とを計つて見て、計畫をお立てになつた事がありますか。此の本を讀めばあの本を讀むことが出來ない、今日失つたものを、明日取り戻す事は出來ないと云ふことを御存じですか。女王達や王侯達と話すことの出來る時に、下女や馬丁の所へ行つて、無駄話をするんですか。永遠に滅びない宮廷が、世界のやうに廣く、日月のやうに夥しい交際、即ちすべての國と時代との選ばれたる人々や、力强く偉大な人々を以つて、皆さんの前に開かれて居て、其處へ入つて行けるのに、一方に於いて、此處で入場權を得るために、彼處で謁見を得るために、腹を空かした凡俗の輩の押しあつて、而もさうすることが、尊敬を受ける權利を得ることになるのだと思つて、得意になつて居るのですか。此の宮廷へは、何時でも入ることが出來ます。此處では、交りたい人と交り、得たいと思ふ地位が得られます。皆さん御自身に過失がない限

り、一度入れば、其處から追出されることはありません。言ひ換へますと、皆さんの讀書の品位によつて、皆さんの天性の品位が驗されるのです。

一二　「皆さんが得たいと思はれる地位」とは、「皆さんに適當した地位」と言つても宜ろしいのです。と言ふ理由は、此の過去の人々の宮廷は、現に在る貴族社會とは次の點に於いて違つて居ます。過去の人々の宮廷へは、勉强と功績とで、入れるのであつて、その他の何物を以つてしても入れるのではありません。其處の門番は、金で買收することも、權勢で脅すことも、詭計で欺くことも出來ません。下劣な人も野卑な人も其處へは入れません。フォーブル・サン・ヂエルマン〔巴里の貴族が住んでゐた所〕の門口では、次のやうな簡單な質問があるのみです。「お前は、入る價値があるか。それなら入れ。お前は貴族の友達になりたいと思ふか。自ら貴族になれ。そうすれば貴族の友達にしてやる。お前は賢人達と話をしたいと思ふか。それなら、それを理解するように努めよ。さうすれば聞かせてやらう。然し、他の條件では駄目だ。お前が吾々の所まで向上して來ないならば、吾々

はお前の方へ身を屈するわけには行かない。生きてゐる君主は禮儀を裝ふだらうし、生きてゐる哲學者は思ひやりのある苦心を拂つて、自分の思想を說明するであらう。然し此處では、吾々は詐りもしなければ、註釋もしない。吾々の思想に依つて喜びを感じたいと思ふならば、吾々の思想のレベルまで向上して來ねばならぬ。吾々の存在を認めたいと思ふならば、吾々と同じ感情を持たねばならない。」と。

一三　扨て、皆さんは前述のやうにせねばなりません。之は中々難かしいことです。一言で言ひますと、皆さんが斯うした人達の友達に成りたいならば、その人達を愛さねばなりません。野心は何の役にも立ちません。その人達は、皆さんの野心を輕蔑します。彼等を愛さねばなりません。そして、次のやうな二つの方法で愛情を示さねばなりません。

一、先づ、心からその教へを受け、その思想を理解したいと思ふこと。くれぐれも言ひますが彼等の思想を理解するのであつて、その人達の言葉の中に、自己の思想を見出すことではありません。書物の著者が、皆さんより賢くないならば、讀む必要はありません。皆

さんより賢いならば、多くの點で皆さんとは違つた考へを持つてゐるでせう。「此の本は何と好いんだらう。――私の考へてゐることゝ全く同じ事が書いてある。」と、好く本を讀んだ後に言ふものですが、良い本を讀んだ時には、次のやうに思ふのが本當でせう。「何と妙な事が書いてあるのだらう。そんな事は以前に少しも考へた事はない。けれども、それが眞理であることは解る。今それが眞理であることが解らなくても、何時かは解るやうになるだらう。」と。然し、こんな風に、著者に對して謙遜であつても無くても、孰れでも好いですが、兎も角本を讀むのは、著者の言はうとしてゐる事を理解するためでありまして、自分と同じ考へを其の中に見出すためではないと言ふ事を、ハッキリ知つて居らねばなりません。著者の思想を判斷する資格があるとお思ひになるなら、讀んだ後になさるが宜しい。最初は先づ、著者の思想を確めることです。それから亦、著者が立派な人である場合には、即座に、その思想を理解出來る、と言つたやうなわけには行かないものであります。それ所か、長い間かゝつても、その思想を全部理解出來るものではありません。それ

は、著者が、考へて居る所を、ハッキリ言はないからではなくて、考へて居る事の全べてを言ひ盡すことが出來ないからであります。尙、奇妙なことですが、讀者が著者の思想を、本當に知りたいと思つて居るかどうかを確めるために、暗々裡に自己の思想をほのめかすとか、喩へを以つて言ふとかするものであります。私には此の理由が解りません。また、何故默りこんでゐて、その思想を發表しないのか解りません。立派な著書は、その思想を讀者を助けるために與へるのではなくて、褒美として與へるのであります。從つて、近づくのを許す前に、先づそれを與へる値打ちがあるかどうかと確めやうとするのです。黃金に就いても同じ事が言へます。地球の電力が、地球内に在るあらゆる黃金を、一度に山の頂に運び上げて、君主達も人民も、黃金は其處にあると言ふ事を知り、掘る面倒も心配もなく、機會を覗ふことも、時間の浪費もなく、切取つて必要なだけ金貨を造ることが出來る、と云つたやうな風にならない理由はないと思はれるのですが、自然はさうは致しません。誰にも知れないやうに、黃金を大地の小さい割目に入れて置くのです。長い間掘つて

も、一粒の黄金をも見附けることが出來ない事もありませう。少しでも見附けるためには苦しくても掘らねばなりません。

一四　最も善い智識に就いても、丁度之と同じことが云へます。良い本を讀まうとする時には、皆さんは次のやうに自問して見るべきです。「私はオーストラリアの抗夫のやうに働く氣があるかどうか。鶴嘴やシャベルは整つてゐるか、仕度は好いか、腕まくりは充分か、呼吸はどうか、氣分はどうか。」と。もう退屈なさつたでせうが、此の喩へは中々有益なものですから、もう少し續けて行きませう。皆さんの探求してゐられる金屬は著者の精神であり、思想であります。その言葉は、著者の精神や思想を理解するために、打碎き溶解せねばならない岩石のやうなものです。鶴嘴とは、注意や、分別や、學識であり、鎔鑛爐とは思慮深い魂であります。此等の道具と火とを持たないで、立派な人の思想を理解しようと望んでも、それは無理です。一粒の金屬を得るためには、或る時は何處迄も掘つて見なければならず、或る時は辛棒して鎔解せねはならないこともありませう。

一五　其處で先づ、私は確信を以つて申しますが、一語一語をチッと睨んで、一句一句——否、一字一字と、言葉の意味を確める習慣を養はねばなりません。

本の研究が「文學」と呼ばれ、本の研究の大家が、書物の人とか、言葉の人とかは言はれないで、文字の人と言はれるのは、意味を表す役目をする音聲に、意味を表す役目をする文字を對立させて言つた迄ですが、此の言葉を次の事實と結びつけて考へて見ると面白いと思ひます。長生き出來れば、大英博物館の書物全部を讀むことも出來るでせうが、その人は依然として「文字のない人」、即ち無教育の儘でゐることもあります。然し、良書を十頁、一字一字、正確に讀むならば、それだけは教育のある人になるのです。教育と無教育との違ひは、知識の方面だけに就いて言ひますと、此の正確さに存るのです。立派な教育のある紳士でも、言葉數を多く知らない人もありませうし、自分の國語以外に話すことの出來ない人もありませうし、あまり讀書しない人もありませう。然し、如何な國語にしても、知つてゐる國語は正確に知つてゐて、發音する言葉は全べて、正しく發音するでせ

う。就中、彼は正系の言葉に通じてゐます。又、系統の正しい起源の古い言葉と、近代になつて出來た言葉とを、一目見て區別することも出來ます。言葉の祖先と、血族結婚と、遠い親類關係と、凡ゆる時代に於いて一つの言葉が使はれた範圍と、その意味とを記憶して居ます。其れに反して、無教育な人は、記憶に依つて多くの國語を知つてゐて、話すことが出來るかも知れませんが、實際は何れの國語の一語でも、自分の國語ですら、本當に知つてゐるとは言へないこともあります。人並に悧巧で、物分りの好い水夫であれば、大抵の港で上陸して困ることはありません。けれども、何處の國語にしろ、一寸話しさへすれば、彼が無教育であることが解ります。一つの文章の調子とか、言ひ廻しで、直ちに學者であるかどうかゞ解ります。教育のある人は、今申しました事を、強く感じ、強く認めて居るので、アクセントを間違へるとか、綴りを一つ間違へるだけで、文明國の議會では、終まで頭が上らなくなることもあるのです。

一六 成程、此れは正しいことですが、私の言ふ此の正確さが、もつと重んぜられるやう

になり、眞面目な目的のために求められないのは遺憾なことであります。ラテン語の母音の長さを間違つたがために、下院で失笑を買ふのはいゝとしても、英語の意味を間違へて話しても、顰蹙されないのはよくありません。言葉のアクセントに細く注意し、意味にもつと注意するならば、言葉はもつと少くても用は足りるのです。他の言葉を使へばぼんやりとしか言へないので、千の言葉を使つても出來ないやうな働きを、正しい言葉の一つ一つがするものであります。言葉は注意しなければ、時には有害な働をするものであります。現今、ヨーロッパでは、人々が盛んに使つてゐて、而も意味のハッキリしない言葉があります。(昔はさう澤山はなかつたのですが、一つには淺薄で汚れてゐて、目茶苦茶に飛び廻り、次から次へ傳染して行くつまらない知識が、到る所に擴まつたがためと、今一つには、學校で人間の眞義を教へないで、徒らに問答や語句を教へたがためでありますが)——意味の解らない言葉が廣まつて居ます。誰も解らない儘で使つて、かう言ふ意味だとか、あゝ言ふ意味だとか、否さうではないとか、自分勝手な意味を付けて見て、その言葉のため

に爭ひを起し、甚だしきに至つては、生命を投げ出す者もある位です。と云ふのは、さう言ふ言葉は、カメレオンの皮膚のやうな、各々の人の想像と云ふ色の上衣を着て居て、同じ色をした地面で待ち伏せて居て、人が來ると飛び掛り引き裂くのです。意味の解らない言葉程、人に危害を加へる猛獸もなく、狡猾な外交官もなく、又こんなひどい目に遭はせる毒殺者もありません。其等は人間の考へを司る不正な執事であります。人がどんな想像とか、考へを持つて居ても、自分勝手に意味をつけた言葉で發表しますので、その人の言ふ意味が解らなければ、その人の考へは解らないと言ふことになります。

一七 英語の樣に、種々の國語が混り合つて出來て居る國語では、或る考へを言ひ表すのに、莊嚴に表はさうと思へば、ギリシヤ語とかラテン語から來た言葉を使ひ、普通に表はさうと思へば、サクソン語とか、何か他の普通の言葉を使ふことが出來るので、どうしても曖昧になり勝ちです。例へば、本を莊重に言ひ表はさうとする時には、本と言ふ言葉のギリシヤ語である biblos（ビブロス）とか biblion（ビブリオン）と云ふ言葉を使ひ、さうでない場合には book（ブック）と言

ふ字を使つてゐますが、さうしないで、ギリシヤ語許りを使ふやうにするか、それともギリシヤ語の方は一切使はないやうにするか、孰れかにすれば、一寸奇妙ですが、有益な影響があると思ひます。兎角私達は、言葉の「形式」を、その言葉の表してゐる內容の「力」と、思ひ違ひをし勝ちです。〔バイブルと言ふ言葉を、キリストの教そのものと思ひ違へることを指す。バイブルとは單に本と云ふ意味〕例へば、聖書の使徒行傳の、第十九章第十九節のやうな所を、英語に譯さないで、ギリシヤ語の儘で、「曩に魔術を行ひたる多くの人々も、皆其バイブル〔英語に譯せば本と云ふ意味〕を持ち出し、衆人の前にて之を燒けり。後此價を計りしに、銀五萬に止れり。」と讀むとしますと、多くの愚な人々にとつては、どんなにためになるでせう。それに反しまして、ギリシヤ語を用ふれば Holy Bible（ホーリイ バイブル）とある所を、譯して Holy Book（ホーリー ブック）と云ひますと、「昔天を造り、今尙それを保存する所の神の言葉」〔ペテロ後書第三章第五節—第七節を參照〕は、モロッコ皮の表裝をして人に贈物とすることは出來ないし、蒸氣鋤や蒸氣印刷機の助けを借りても、此等の言葉を路傍に播き散らす〔馬

太傳第十三章第三節—第八節參照〕事も出來ないと言ふことが、ハッキリして來るでせう。

一八 又ギリシャ語の katakrino と言ふ字を譯す場合に、強く響かせようと思へば、調子の高い damno と云ふ字を用ひ、弱く響かせようと思へば condemn と言ふ字を用ひるとしますと、英國の俗人共は、どんな影響を受けるか一寸考へて御覽なさい。「信んぜざるものは罪に落すべし。」と云ふ言葉に就いて、無學の牧師達もきつと立派な說敎をしたことでせう。然し彼等も、ヘブライ書第十一章第七節を「彼の家族を救ひ、之に依つて世人を罪に落せり。」とか、ヨハネ傳第八章第十節及第十一節を「婦人よ、御身を罪に落せし者は非ざるか。婦人曰く、否と。イエス答へて曰く、吾も亦御身を罪に落さず、歸られよ。再び罪を犯す事勿れ。」とは、恐ろしくて譯す氣にはなれない事でせう。歐洲に於ける人心の分裂のために、流血の慘事を引き起し、此の慘事を防ぐために、森の木の葉のやうに數多くの偉れた人々が、心の中ではもつと深い原因を持つてゐたでせうが、擾亂の中に身を沈めて了ひましたが、此の人心の分裂も矢張り歐洲の人々が、普通の會合を表す、ギリシャ語の

ecclesia と言ふ言葉を、特に宗敎上の目的のために開かれる會合に、威嚴を與へるために使用したり、その他之と共に、presbyter〔年長者と云ふ意〕を縮めた形として priest〔僧侶の意〕を使つたりして、色々な曖昧な言葉を使つた事から、主として起つて來たのであります。

一九 言葉を正しく扱ふためには、皆さんは次の樣な習慣を養はねばなりません。殆んど全べての英語は、最初は、東方諸國で大昔話された方言は申す迄もなく、サクソン語、獨逸語、佛蘭西語、ラテン語、ギリシャ語等の他の國々の言葉であつたのです。最初はギリシャ語で、次にラテン語になり、その次にフランス語か獨逸語になり、最後に英語になつたやうな言葉も澤山あります。さう言ふ言葉は上に述べた國々で話される時には、意味も使ひ方も夫々違つてゐたでせうが、本來の意味は無くならないのであつて、今日でも、立派な學者はさう言ふ言葉を使ふ時には、本來の意味を心に泛べるのであります。ギリシャ語のアルファベットを御存じにならなければ、それを學びなさい。若い人も老人も、少年

でも少女でも、眞面目に讀書したいと思ふ人は、ギリシャ語のアルファベットを學びなさい。それから、先刻申しました各國語の良い辭書を手に入れて、一つの言葉に就いて疑はしい所があれば、直ちに、辛棒強く、辭書を繰るのです。先づ差當つては、マックス・ミュラー〔一八二三年―一九〇〇年、名高き言語學者〕の講義を一通り讀み、その次ぎには、疑はしい言葉は一言も見逃さない事。これは中々大變な仕事ですが、やり始めて見ると大變面白いもので、終には面白くてたまらなくなるものです。皆さんが立派な人格をお作りになる上にも、測り知れない利益を與へることになると思ひます。

所で、今申しました事は、何もギリシャ語やラテン語、佛蘭西語を覺えやうと努力することではありません。如何な國の言葉にしても、完全に學ぶためには、一生かゝつても成就しないものです。然し乍ら、英語が英語になる迄に、どんな意味で使はれて居たかと言ふこと、及び、立派な作家は一つの言葉を、どんな意味で使つて居るかと言ふことゝは、容易に知ることが出來るでせう。

二〇　扨て、そこで一例としまして、本當の本の中の數行を、皆さんと一諸に注意深く讀んで見て、其結果どう言ふ風になるか見ませう。誰でも知つて居る本を讀むことにしませう。英語の本で、皆さんが是程よく御存じで、而も是程眞面目にお讀みになつたことのない本はないと思ひます。その本と言ふのは、ミルトンの「リシダス」〔此の詩は、ミルトンが親友の死を悼み、併せて、腐敗せる敎會の滅亡を豫言せるもの〕で、その中の數行を讀んで見ませう。

「最後に來たり、最後に行きしは
ガレリア湖の水先案内。〔聖ピーターを指す、馬太傳第四章第十八節參照〕
二種の金屬にて成れる大きなる鍵〔馬太傳第十六章第十九節參照〕二つを持ち、
（黃金なるは開き、鐵なるはハツタと閉す）
法冠を戴きし頭を打慄はせて、嚴に語れり。
「嗚呼、世にも代へ難かりし若者よ。

自らの腹を滿さんとて羊小屋へ
這ひ込み、押し入り、攀ぢ登る輩の餘りにも多き世に。
如何にして羊飼ひの饗宴に紛込み、立派なる招かれし客を押し斥けんと。
餘人のことに彼等は心せず。
盲たる口よ。羊杖を使ふすべも知らず、忠實なる羊飼ひに屬すべき
技術の一つも心得えず。
されど、そは彼等に何の意義ありや。
足らざる無く、富み榮ゆ、彼等は。
氣が向けば、内容なく味なき歌を、
邪なる藁にて造りし笛にて歌ふ。
飢えたる羊群、見上ぐれども食を與へられず、
腐りたる瓦斯にて脹れ上り、汚れたる水氣を吸ひ、

内臓より腐り、斯くして惡疫は擴る。貪慾なる狼密かに爪を磨ぎて
日に日に貪り喰へども、何事も言ふ人無し。」

さて、此の詩を、よく考へて見て、一語一語を驗べて見ませう。

先づ最初に氣の着くことは、ミルトンが聖ピーターに、司教の役目をすつかり與へたゞけでなく、新教徒が烈しく斥けてゐる、司教の服裝までも與へてゐるのは、奇妙ではありませんか。「法冠を戴きし頭」と書いてありますが、ミルトンは國教會の監督を嫌つて居ましたのに、どうして又聖ピーターに「法冠を載かし」たのでせう。「二つの大きなる鍵を持ち」とありますが、此れはローマ法王が代々繼承しようと望んでゐる鍵の力で、ミルトンは黄金の鍵の光の助けを借りて、自分の言ひたいことを一層徹底させるため、唯詩を書く上でだけ認めたものでせうか。

所がさう言ふ風に考へてはいけないので、立派な人と言ふものは、生死を扱ふ教義の事を述べる時に、芝居で使ふ舞台上の技巧と言つたやうなものを使ふものではありません。

そんな事をするのは小人に限られてゐます。ミルトンは口で言ふ通りの事を考へて居るので、しかも心から考へて居るのであつて、自分の考へを述べるために、精神に有るかぎりの力を注いで居ます。故に、僞りの國教會の監督達を嫌つても、本當の監督達を愛して居たので、先刻の詩の中の湖の水先案内と云ふのも、ミルトンの考へでは、本當の教權の現れであり、支配者であるのです。「我汝に天國に入るの鍵を與へん」と言ふ聖書の言葉を、ミルトンは正しく讀んで居たことも之で解ります。成程、彼は清教徒ですが、世の中に惡い監督があるからと言つて、此の言葉を本の中から抹殺しようなどゝは考へません。ミルトンの言つた事を理解しようと思へば、其所から私達は先づ、ミルトンの詩の言葉を理解せねばならないと思ひます。ミルトンの詩の言葉が、まるで反對の宗派の武器でゝもあるかのやうに、横目で睨んだり、息をひそめて讀んだりするのは苦だしい間違ひです。それこそ、凡ゆる宗派の人々が深く心に留めて置くべき、嚴かな、廣く通ずる言葉であります。扨、今少し論を進めてから、再び振り返つて考へた方が、ハッキリ分ると思ひます。と言

ふのは、斯樣に本當の監督の職に附隨して居る、權力と言ふものを強く主張して居るのを讀むと、監督の職を要求する僞り者とか、もつと一般的に言ひますと、牧師と言ふ形に現れてゐる權力と位とを要求する僞り者を、如何に攻擊したら好いかと言ふことを、私達は以前よりも眞面目に考へるやうになつて來ます。ミルトンの言葉を借りますと、さう言ふ輩は「自らの腹を滿さんとて、羊の檻に這ひ込み、押し入り、攀ぢ登る」輩なのです。

二一　好い加減な作家であればやるでせうが、ミルトンともあらう人が、此の三つの言葉を唯詩の形を整へるために使つたのだとは、決して考へられません。「這ひ込む。」「押し入る。」「攀ぢ登る。」と云ふ三つの言葉が全部必要であつたので、特に、此の三つの言葉を用ひたのです。他の言葉を使つたのでは言ひたいことも言へなかつたでせうし、又此の上に他の言葉を附加へることも出來なかつたのでせう。不正直な態度で教權にありつかうとして居る人々を、三つの種類に分けて考へることが出來るのですが、其の三つの種類の人々の特徴を、此等の言葉は、すつかり言ひ表して居ります。三つの言葉の第一番目に相當す

るもの、即ち羊の檻へ「這ひ込む」者達と言ふのは、役目とか名譽とかは欲しないで、裏面の勢力を手に入れようとし、萬事こそこそと抜目なく立廻つて、人々の心を暗に見て取つて、密に此れを操るために、身を低くして如何な役目にもつく者です。その次の羊の檻に「押し入る」者達とは、言葉を代へて言はゞ、遮二無二に突入する者達と言つても宜いのですが、左樣な者は持つて生れた傲慢な態度と、達者な辯舌と、煮ても燒いても食へない無遠慮とを以て、人々に自分の言葉を無理矢理に聞かせて威張り散らすのです。最後にある「攀ぢ登る」者達とは、しつかりした態度で勉強はするのですが、其れと言ふのも、唯に自分の野心を遂げるための勉強であるので、高い位や權力を得て「神の遺産を繼ぐ者」とは成れるでせうが、「信者の手本」とは成れないのです。

二二 さて次の詩句は

「如何にして羊飼ひの饗宴に紛れ込まんかとのみ。
餘人のことに彼等は、心せず。

盲たる口よ。」

とあります。私は此處で讀み續けることを一寸中止します。その理由は、此れは奇妙な言ひ方で、口と言ふ言葉に盲たると言ふ形容の言葉を附けるのは、何としても不注意で、學問のある人らしくもないと、考へたくなるからです。

然しさうではなくて、此の大膽で率直な言廻しは、讀者に其句を熟視させて忘れさせないためであり、此の二つの單綴音は教會の二つの大きな職務、即ち監督と牧師の職務の本來の性質の正反對を、ハッキリと表してゐるのであります。「監督」とは「監視する人」のことであり、「牧師」とは「食を與へる人」のことであります。ですから、凡そ監督らしくない性質と言ふものは、盲目であることであり、牧師らしくない性質とは、食物を與へる所か、食物が欲しい、言ひ換へますと口になりたいと言ふ性質でありませう。それで、此の正反對を表す言葉を、二つつぎ合せて見ますと「盲たる口」と言ふ言葉が出來上ります。此の考へを今少し突きつめて見るのも面白いと思ひます。宗教界で行はれる罪惡と言ふも

のは、大抵監督達が光明よりも權力の方を望むことから起きて來たのであります。權力を求め前途の光明を求めない。一體好く考へて見ますと、監督達の役目は信者を訓戒し譴責することで、信者を支配することでは無い筈です。支配するのは君主の役目であり、監督の役目と言ふのは、信者の群を監視し、一人々々其の數を數へ、何時でも信者の事情を報告することが出來るやうにしておくことです。信者の數を數へもしなければ、その信仰の狀態を說明することが出來ないのは當然です。故に、監督が先づ最初にせねばならないことは、自分の敎區に住んで居る全べての人の子供の時からの經歷と、現在の狀態とを、如何な時でも知れるやうな所に身を置くことでありませう。例へば、あの裏通りを下つた所でビルとナンシイとが毆り合ひをして、お互の齒をたゝき折つたと言ふやうな事があつた場合に、監督はそれを知つて居るでせうか。彼等に目をくれるでせうか。其れ迄に彼等に目をくれた事があるでせうか。ビルが常にナンシイの頭を毆りつける樣になつた仔細を、彼は詳しく說明することが出來るでせうか。出來なければ、譬へソールズベリーの塔のや

うに高い法冠を載いて居ても監督とは言へない。例へて申しますと、橋頭に立つて見張る役目をせずに、舵を握つて舟を操らうとしたのであつて、行く手を見ることが出來ませんから、監督とは言へないのです。「裏通りのビルの世話を燒くのは監督の役目ではない。」と皆さんは仰言るでせう。すると監督が世話をやくのは、房々とした羊毛を身につけた羊達、卽ち富有な人々に限られてゐるとでも皆さんはお考へになるのですか。さて此處で先刻のミルトンの詩に立戻つて、次を讀んで見ますと「飢えたる羊の群は見上ぐれども食を與へられず、貪慾なる狼は密かに爪を磨いて」(と云ふやうなことを監督達は少しも知らないのですが)「日に日に速かに貪り食へども、誰一人咎むる者もなし。」とあるではありませんか。

「然し我々は監督に就いて、そんな風には考へてはゐない。」と皆さんは言はれるでせうが、聖ポールは此の樣に考へて居たし、ミルトンも此のやうに考へてゐたのです。聖ポールやミルトンが正しいか、それとも皆さんが正しいかは孰れでも宜いとして、自分達と同じ考へを、ミルトンの作品や聖ポールの著作中に見つけようとして、それらをお讀みにな

つてはいけないのです。

二三 更に前に進んで讀んで見ますと、

「有毒の瓦斯にて眠れ上り、腐りたる水氣を吸ひ込む。」

と云ふのがあります。好く世間で「貧乏な人達は肉體の世話は受けないが、靈魂の世話を受けてゐる。即ち精神の食物を得て居るではないか。」と言はれるが、それに答へてゐるものだと思はれます。

ミルトンの言葉に依ると「貧乏人達は精神の糧などは得てゐない。唯有毒な瓦斯で眠れ上つてゐるだけだ。」とあります。この言葉は大變粗雜なもので、どうも意味がはつきりしない、と皆さんはお考へになることゝ思ひますが、これも矢張り前に述べました説明の通り、言葉を正確に檢べて見ますと、確かな言ひ方だと云ふことがわかります。皆さんがラテン語とギリシャ語の辭書をお出しになつて「靈魂」〔spirit〕と云ふ字の意味をしらべて御覽になると「靈魂」と云ふ字はラテン語の「呼吸」〔breath〕と云ふ字の縮まつたもので

あることゝギリシャ語の「風」〔pneuma〕と云ふ字の意譯であることがおわかりになることでせう。その他、ギリシャ語の「風」と云ふ字は聖書の中の「風はその好むところへ吹く。」と今一つ「靈より生れし人も皆同じ。」と云ふ句の中では「風」〔wind〕又は「靈魂」〔spirit〕と譯してあります。「靈より生れし人」と云ふ句の、靈と云ふ字の意味は息のことで、先つきの句は「息より生れし人」となるのです。何故かと申しますと、その息と云ふのは、魂と肉體とに吹き込まれた神の息のことを言つてゐるからです。英語の inspiration〔靈感〕expire〔と息をはき出す〕と云ふ字の中では、息と云ふ字を正しい意味で使つてゐるのです。

さて、羊の群〔註、信者のこと〕の中へ吹きこまれる息には二つの種類がありまして、その二つとは神の息と、人間の息とであります。空の空氣が、丘の上にゐる羊群に、健康と生命と平和とを齎らすやうに、神の息は信者に健康と生命と平和とを齎らすのでありますが、人間の息は沼の上を立ち籠めてゐる霧のやうに、悪疫や流行病の働きをするもので

あります。此の人間の息のことを、牧師は精神的と呼んで居りますが。――そして、それを吸ひ込みますと、身體の内部から腐つて行き、丁度死骸が腐敗して、そのために出來る瓦斯で脹れるのと同じやうに、脹れあがつて了のです。虚僞の宗教の教へに就いての眞相はこの通りでありまして、そんな間違つた教へを信ずるやうになりますと、いたましくも此の「脹れ上る」徴候が歴然と現れて來るのです。改宗して兩親に教へを説く子供とか、改宗して善人に教へを説く前科者とか、半生を阿呆の狀態で過ごしてから改宗して、突然神の存在に氣がつき、我こそは神より特に選ばれたる者、神の使ひであると思ひこむ狂人とか、大宗門小宗門を問はず、舊教であらうと新教であらうと、又高教會に屬しようと低教會に屬しようと、何れにしても自分達は絶對に正しく、他は全然間違つてゐると考へてゐるやうな信者とか、取りわけその中でも善行をしないでも善を考へるだけで、又行はないでも口に唱へさへすればとか、實際働かないでも働きたいと思ふだけで、我々は救はれるのだと思つてゐるやうな者こそ、霧の子であります。これらの者こそ水を含まぬ雲であ

り、血も肉もなく、腐敗した瓦斯と皮膚とから出來た身體であります。自ら腐敗し、他をも腐敗させる、惡魔どもの吹く笛に合せて「風で脹れ上り、腐敗した水氣を吸ひ込む」輩であります。

二四　さて、前に述べました鍵についての詩句は、もう理解することが出來ると思ひますから、その鍵の力と云ふ事に就いて考へて見ませう。此の鍵の力を解釋するに當りましてミルトンとダンテとの違つた所を考へて見ますのに、ダンテの方は此處に限つて考へ方が薄弱であります。ダンテは二つの鍵は何れも天國の門を開くためのものであり、一つは黄金、今一つは銀で出來てゐて、聖ピーターが門番の天使に與へたものであるとして居ります。それで門に三つの階段があり、鍵が二つあるとは、一體何の事を云つてゐるのかを、決定することが容易ではありませんが、一方ミルトンの方は一つの鍵は黄金で出來てゐて、天國の門を開くためのものであるとし、今一つの方のは鐵で出來てゐて、「知識の鍵を持ちながら、自らは天國に入ることの出來ぬ邪惡な説教者達の入らねばならない、牢獄の扉を

開ける鍵だとしてをります。

今までに申上げました事から、皆さんは監督とは監視する人であり、牧師とは食物を與へる人であると云ふことがお分りになつてゐると思ひます。實際さう云ふふうにする人については、聖書の中にも次のやうに云つてあります。「他人を潤す者は潤ひを受く。」然し此の反對のことも亦眞理であります。他人を潤さざる者は、自らを萎えしむとか、人を監視せざる者は自ら盲目となり――永久に開くことなき牢獄に閉ぢ込められるとかも言ふことも眞理であります。あの世に牢獄があるやうに此の世にも牢獄があり、あの世の牢獄に繋がれねばならない人は、先づ此の世の牢獄に繋がれねばなりません。「嚴の使徒」として現れてゐる強い天使達に與へられた「彼を捕へ、手足を縛り、外に投げ出せ。」と云ふ命令は、說敎者達に對して發せられるのですが、說敎者達が助力を拒絕し、眞理を斥け、虛僞を强ひる度に、或は强く、或は弱く、此の命令は行はれるのであります。其れが爲に、說敎者達が人を縛ることが强ければ强い程、自ら縛られることも强くなり、說敎者達が他人を誤導

すればする程、自ら遠くへ投げ出され、遂には牢獄の鐵の門が、彼の上に固く閉ざゝれるのですが、それは丁度ミルトンの詩の句「黃金なるは開き、鐵(くろがね)なるはハッタと閉す。」と云ふのに相當してゐるものと思はれます。

二五　今迄申上げました所で、皆さんもミルトンの此の詩が好くお解りになつたことゝ思ひます。まだ〳〵此れ以上に、此の詩の中には含まれたこともありますが、本當の「讀書」の方法として、作品を一字一字調べて行く例としましては、これ位で充分であらうと思ひます。結局我々は本を讀むに當つては、言葉のアクセントとか、表現の方法に能く注意し、自らを著者の立場に置いて、自分の個性と云ふものを全然捨てゝ了つて、「ミルトンを讀み間違つて、私は斯う云ふ風に考へる。」と云ふのではなくて、「ミルトンはかう考へたのだ。」とハッキリ云ふ事が出來るように、飽くまでも、著者の個性を理解するように努めなければなりません。此の方法を續けて行くうちには、他の書物を讀む時にも「私はかう云ふ風に考へた。」と云ふ自分の考へをあまり重んじない樣になつて來るものです。亦皆さんがお

考へになつてゐた事は、一向大したことでも無かつたことも、お分りになるだらうと思ひます。即ち言葉を換へて申しますならば、如何なる事につきましても皆さんの考へは明瞭でもなく賢明でもない、と云ふ事がお分りになると思ひます。また、皆さんが一風變つた人でない限りは、苟しくも「思想」と云つたやうなものを持つてゐるとは云へるものではありません。重要な事柄については、思想の材料さへも持つてゐない——即ち皆さんは、御自分が考へる權利などはなく、唯事實をもつと知らうと努力する權利だけを持つてゐるのだと云ふことが、段々お分りになることゝ思ひます。唯それ許りではなく、先刻も申しましたやうに、皆さんが一風變つた人でない限りは、差當つて、皆さんの手でしなければならない仕事以外の事に就いて「意見」を持つ權利などは、一生のうちでも多分ないだらうと思ひます。是非ともしなければならない仕事をする方法は、無論直ぐ見つかるでせう。整理しなければならない家がおありですか。お賣りにならねばならない家がありますか。又耕さねばならない畑や、渫はねばならない溝がありますか。かう云ふ仕事をするについ

ては、意見は二つは要りません。一つより多くの意見を持つてゐれば、皆さんは大變危い目に遭はれます。皆さんが自身の仕事の他にも、意見を持たねばならない事が一つや二つはあります。即ち惡事を働くことや、虚言をつくことには、反對しなければならないし、見つかり次第退けねばならないと云ふ事とか、貪慾と喧嘩好きとは、子供でさへも危險な性質なんだから、大人同志とか、國民の間では最も恐るべき性質であると云ふ事とか、結局天地をしろしめす神は、活動好きで、謙遜で、親切な人々を愛し給ひ、怠け者で、高慢で、殘酷な人々を憎み給ふのだと云ふ事とか——まあかう言つた一般的な事については、皆さんは唯一つだけ、强い意見をお持ちにならねばならないのです。その他の事については、宗教についてゞあれ、政治についてゞあれ、科學についてゞあれ、藝術についてゞあれ、大體何も知らないのだ——何も判斷することは出來ないのだと云ふことが、皆さんはお解りになるでせう。譬へ皆さんが立派な教育のある人であるとしても、沈默を守り、日に日に少しづゝ賢くなり、他人の意見を少しでもよく理解しようとする位が關の山である

こともお解りになるでせう。そして皆さんが心からさう云ふ風にしようとされると、最も賢いと云はれてゐる人達の思想でさへ、要領を得た質問と云つた程度のものであることもお解りになるでせう。むづかしい事をハッキリした形に表はし、疑問なら疑問の儘で、何故それが解からないかと云ふ理由を示す事——最も賢いと云はれてゐる人でもこれが精々であります。彼等が「私達の思想に音樂を混ぜ込み、人間の解き得ない疑で、私達を悲しませる」ことが出來れば、それだけで賢人にとつても、私達にとつても充分であります。只今説明いたしました詩の作者であるミルトンは、決して一流の人でも、聖賢などゝ言はれる人でもありませんが、自分の見るものだけは鋭く觀察いたしますので、その言はんと欲する所も悉く私達に良く分かります。けれどもミルトン以上の人の場合にはその人の眞意を計りかねます。またそんな人は自分でもその眞意をすつかり知つてゐる理由ではないのです。これを以つてしても、その眞意が如何に宏大なものであるかゞ分かります。今假りにミルトンではなくて、シエイクスピアか或はダンテが、此の教會の權威について持つ

てゐた意見を述べて御覽なさいと、皆さんに御尋ねしたとしたら、皆さんの中に卽座にシエイクスピアなりダンテなりの持つて居た意見を少しでも御存じの方があるでせうか。皆さんはシエイクスピアの劇の一つリチャード三世の中の僧正達に關する場面と、クランマーの性格とを較べて見たことがおありですか。またはダンテの聖フランシスや、聖ドミニクの描寫と、ヴァージルをして驚いて見詰めさせ「永久の刑罰の下に辱しめを受け乍ら、十字架に懸けられし」と叫ばしめた人の描寫か、又はダンテがその側に立つて「裏切り者の刺客の告白を聞く僧侶のやうに」と云つた人の描寫とを比べて見た事がおありですか。シエイクスピアやダンテは、皆さんや私などよりも、能く人間を知つてゐたと思ひます。二人とも俗界の力と宗教界の力との爭鬪の眞只中にゐたので、何か意見を持つてゐたのは確かですが、さてそれでは何處にその意見は表はれてゐますか。それを裁判所へ持ち出せ。シエイクスピアなりダンテなりの信條を個條書きにして宗教裁判の取調べを受けさせよ、と云つて見たくなります。

二六　今一度申しますが、皆さんは幾日お掛りになつても、斯ういふ偉人達の本當の目的とか敎へとかを、理解することは出來ないでせう。然し乍ら、此等の偉人達を心から研究なさるならば、自分の「思想」だと思つてゐたものが、唯その場限りの偏見であり、まるで水に漂はされた頼りない縺れた雜草のやうな、誰一人顧みるものもない考へであつたことがお分かりになるでせう。否それどころか、大抵の人の心は人に顧みられず、ごつ〳〵してゐて、半は不毛で半は五月蠅籔と、風に撒き散らされた、妄斷と云ふ毒草の生ひ茂つてゐる荒野原であることゝ、偉人達のためにも亦皆さん方御自身のためにも、先づその野原を輕蔑して、一生懸命に火をかけて、藪と云ふ藪を片端しから燒き拂つて健全な灰となし、然る後耕して種子を播く可きであると云ふことゝがお分りになると思ひます。皆さんが一生やつて行かれる本當の讀書と云ふことは、先づ「汝等の休閑地を耕せ、荊棘の中に播く勿れ。」と云ふ命令に從ふことを以つて第一としなければなりません。

二七　二、偉ぐれた人達の思想を理解するために、その言に耳を傾けるやうになると、皆

さんは更に今一段の飛躍をせねばなりません。それは何かと申しますと、その人達の心の中に入ることであります。最初皆さんが、偉れた人達をはつきり見るために近づかれたやうに、今度はその强く正しい情熱を、皆さん御自身もお感じになるためには、偉人達と共に居らねばなりません。情熱と云つても「感情」と云つてもよろしい。私は感情と云ふ言葉を恐れはいたしません。まして感情そのものを恐れも致しません。最近、感情が大いに批難されたのを御存じのことゝ思ひます。私は思ひますのに、感情を少くするどころか、もつと感情的になつた方がよいのです。一人の人を他の人よりも高尙であるとするには、何處で區別いたしますかと云へば――それは一つの動物と他と動物とを區別する場合にも當嵌りますが――一つは他の者よりも物を感ずる力が强いと云ふ點にあります。私達が海綿であると假定しますと、恐らく物を感ずるなどゝ云ふことは容易ではありますまい。又私達が何時鋤で二つに斷ち切られるか知れないやうな、蚯蚓であると假定しますならば、感情などはかへつてない方が好いでせう。然るに私達は人間であるが故に、感情と云ふも

のも大變役に立つのです。といたしますと、人間たるの名譽も、私達の持つ感情に比例して、大きくも小さくもなるものであると云へます。

二八　却説私は先に、死者の偉大で純粹な社會へは、輕薄で野卑な人は入ることを許されないと申しましたが、「野卑」と云ふのは一體どう云ふ意味だとお考へになりますか。また皆さんが「野卑」と言ふ言葉をお使ひになる時は、どんな考へでお使ひになるのですか。之は考へて見るとなか〳〵面白い問題であることがお分りになるでせう。簡單に申しますならば、野卑の本質と云ふのは感情が缺けてゐる事にあるのです。單純で無邪氣な野卑と云ふものは、心身を未だよく訓練せず發達させないが爲に、在する鈍さに過ぎないのですが、本當の野卑と云ふものには恐るべき冷淡さを含んでゐて、それが極端になると、不安も喜びも恐怖も憫情も感じないで、凡ゆる默的の習性と罪惡とをやり遂げるやうになるのです。私達人間の手が活動力を減じ、心が無情になり、病的な習慣に陷り、良心が頑になると、即ち野卑となるのであります。同情心が無くなれば無くなるだけ、理解力が鈍れば鈍

るだけ、或は普通一般に使はれる正確な言葉で表しますならば「觸覺」とか「觸れて感ずる能力」などを失へば失ふだけ、私達は增々野卑になるのです。此の觸れて感ずる能力を持つてゐる者は、植物の中では眠り草であります。殊に純潔な婦人は最も多くもつてゐるのですが、それは理性を超越した纖細で豐かな感情であり、理性を導き、それに認可を與へるものであります。理性は何が眞理であるかと云ふことを決定する能力しかありません。天地創造の神が造り給ひしものを、善なりと認め得るものは、唯神より與へられた人間の持つ情熱のみであります。

二九　故に、私達が古聖賢の立派な集りに近づくにしても、唯その人々から何が眞理であるかと云ふことを敎へて貰ふ爲ばかりでなく、尙大切な事は、何が正しいかと云ふことを、その人達と一諸に感ずる爲であります。扨その人達と共に感ずる爲には、先づ彼等のやうな人物にならなければならないのですが、これは大變困難なことで、誰でも、努力しなければ成れるものではありません。本當の知識は、陶冶され試錬された智識であり、ふと浮

かんで來た思想などではありませんが、それと同樣に、本當の熱情も、陶冶され試錬された熱情でありまして、ふと浮んで來た儘のものではありません。最初に浮んで來たものは、空虛で虛僞であてにならないものであります。皆さんがそれに負けておしまひになるならば、誤つた方向に遠くまで引きづられて、益なき追求と空洞な熱狂との中に落ち込み、遂には本當の目的も本當の熱情も失つてしまふやうになるでせう。人間が持つてゐる感情は、何れも本來から間違つたものではないので、唯陶冶されない場合にのみ間違つてゐるのです。感情が力强く正しいものであれば、氣高いと云はれるのでありますから、弱くて詰らないとそれは惡いと云へます。手品師が金色のボールを手玉にとるのに、見惚れてゐる子供などの持つ詰らない驚きは、下品な驚きと云つても好いと思ひます。然し一方では、天體の黃金の球が、それを作つた神の手によつて、夜もすがら手玉にとられてゐるのを目を見はつて眺める、その場合の驚きは、卑しいものであり、感情は下等なものであるとお考へになりますか。開けてはいけないと云つて禁じられた戸を、竊に開ける子供の持つやう

な、又は主人の仕事を覗きこむ召使ひの持つやうな、詰らない好奇心がありますが、しかし一方では危險を冒して沙漠の彼方に大河の源を尋ね、又は大洋の彼方に大陸の横たはる場所を尋ねたりする場合のやうな、高等な好奇心もあります。更に又「天使達でさへ覗きたいと望むもの」即ち生命の流れの源を尋ね、天國と云ふ大陸の在る所を探る時の好奇心は、もつと程度の高いものであります。又詰らない物語りの筋や結末に、繼々としてゐる時の懸念は下品なものでありますが、一方苦しんで居る國民の生活を、運命は如何に取り扱つて行くかを見る時の懸念は重んじないで好いでせうか。今日我が英吉利に於て憂慮に堪へないのは、皆さんの感情が狹く利己的で微弱であることであります。花束と饒舌とに、底拔け騷ぎと物見遊山とに、戰爭ごつこと陽氣な操り人形とに、徒に感情を傾けてゐて、一方では立派な國民が一人々々殺されてゐるのに、何の手出しもせず涙一滴零さないで傍觀して居ることが出來るとは。

三〇　私は感情の「微弱」とか、「利己的」とか云ひましたが、感情の「不正」とか、「不善」

とか云つた方が良かつたかも知れません。と云ふ理由は、紳士と卑しい人とを見分けるにあたりましても、紳士的國民と――さう呼ばれるやうな國民が存在して居たこともありますが――暴民とを見分けるにあたりましても、次に申します事を標準にするのが最も好いと思ひます。感情が何時も變らず正しくて、正當な深慮と、公平な思考の結果生れて來たものかどうかと云ふことであります。皆さんは暴民を說きつけて如何やうにもすることが出來ます。暴民の感情と云ふものは、大體に寬容であり正しいものでありますが、その感情を持つやうになつた基礎もなく、それがためにしつかりそれを持つてゐるわけでもありません。だから皆さんは暴民を宥めたりからかつたりして、どんな感情でも持たせることが出來ます。暴民は不和雷同して考へ、丸で風邪でも引くやうに容易に意見を抱き、一旦發作が起るとなると、どんな詰らないことについても、ごう〳〵と意見を述べ立てるのですが、發作が止むとなると、一時間もすればどんな大切なことでも忘れて了うものであります。然し乍ら紳士とか紳士的國民の熱情と云ふものは、正しくて節度があり、永續的な

ものであります。例へて申しますならば、大國民は惡漢が一人の人間を殺した事件の證據を考へるのに、全國民の智慧を絞つたりはしないものです。又同族の國民が、一日に何千何萬と云つて互に殺しあつてゐるのに、戰爭の影響で綿の値段が如何なるだらうかと云ふことばかり考へてゐて、戰つてゐるどちら側が惡いかと云ふ事は少しも考へないで、二年もの間傍觀してゐると云ふやうなことはしないものであります。又大國民は、貧乏な子供が胡桃を六つ盜んだと云つて、牢獄へ送つたりは致しません。又大國民と云ふものは、破產者達が一寸頭を下げたゞけで、幾十萬磅の金をこつそり己が懷に入れることを許したり、或はまた貧乏人達の預金で、己が腹を肥した銀行家達が、「如何ともしがたい事情に立至りましたので誠に相濟みませんが。」と云つて、銀行の扉を閉ぢてしまうのを許したりするものではありません。又大國民と云ふものは、武裝した汽船で支那海を橫行し、大砲の砲口を差向けて阿片を押賣りし、追剝ぎが普通使ふ脅し文句である「生命が惜しくば金を渡せ。」と云ふのを「金も生命ももらつたぞ。」と云ふ文句に變へたりして、金を蓄めた者が宏大な

地面を買ふのを、傍觀してゐるやうなことは致しません。又大國民と云ふものは、地主共が僅か一人當り六片の費用を追加して、設備を改善するのを惜しんだ爲に、罪も無い貧乏な人々が、熱病に罹つて焦げ死んだり、糞堆から生ずる疫病で腐れ死んだりすることを許さないものです。又更に大國民と云ふものは、殺人罪を犯した者達の生命を、憐れみの心を以て助けてやつてはいけないだらうかとか、勞はり養つてやるべきではないだらうかなどゝ、涙をぽろ〳〵零しながら、惡德に對して同情を抱いて議論を戰はすやうなことは致しません。最後に、大國民は金錢こそは世の惡の根元であると說く敎へを信じたり、或は主なる國家の事業は、金錢を儲けたいと云ふ希望が動機になつてゐるのだと、聲を大にして叫んだりして、天國と、天國の力とを嘲るやうなことは致しません。

三一 皆さん、私達は一體何故讀書に就いて話したりしなければならないのでせうか。私達にとつては、讀書によつて心の訓練をすると云つたやうな生ぬるいことではなくて、もつと嚴しい訓練が必要なのですが、しかし兎も角も、私達には本當の讀書は出來ないと云

ふことは確かなことであります。先刻云ひましたやうな精神を持つてゐるやうでは、讀書などは出來ません。立派な作家の文の意味が解らう筈はありません。即ち今日の英國の人々は貪慾の餘り狂氣のやうになつてゐて、物を考へる力が無くなつてゐますので、深遠な著作を理解することなぞは到底不可能なことであります。幸なことには、その病が今の所では、物を考へる力が無くなつたと云ふ程度であつて、本性が腐つてしまつたわけではありません。それで、痛切に打つものがあらば、本性の閃光を示すこともあるのです。算盤のとれないことはしない、と云ふ考へが、どんな事をするのにも拔け切らないので、例へば善きサマリヤ人のやうに振舞ふに致しましても、銀二枚を取り出して享主に與へる時にはきつと「俺が今度來る時には四枚にして返せ。」と云ふのですが、それでもまだ心の奥には、立派な熱情を持つ力が殘つてゐます。仕事をするに當りましても、戰爭に於きましても、また社會の不正については默つてゐる癖に、誰か一人が間違つた行ひでもすると、狂氣のやうになると云つたやうな家庭内の間違つた愛情を見るにつけても、熱情が少しはあ

ることがわかります。吾々は勞働者の忍耐に加ふるに賭博者の兇暴さを持つてゐるのですが、それでも尙終日一生懸命で働きますし、又戰爭の本當の原因は解らなくても勇敢に死に赴きます。又自らの肉親を愛し、その死を悼む情に於ては僞りでない所があります。かう云ふ風な狀態であるうちは、國民としても尙一縷の希望があるものと云へます。國民がその生命をしつかり己が手に握つてゐて、譬へ馬鹿げた名譽のためであつても、名譽のために、利己的な愛情であつても、愛情のために、下劣な事業であつても、その事業のために、喜んで生命を投げ出す覺悟がある間は、まだ一縷の希望があります。然し此の本能的で盲目的な道德は、永續きのするものではありませんから、希望だけのことであります。いくら精神が寬大であつても、自ら暴民となつた國民に、永續きのしたものはありません。熱情を訓練し敎導しなければ、却つて熱情の爲に「蝎の尾の鞭」で訓練されるやうになります。

取分け、金を儲けることばかりにかゝつてゐるやうでは、國民は永續きは出來ません。文

學、科學、藝術、自然、同情等を輕蔑し、金錢にのみ心を奪はれてゐるやうでは、國民は無事に存在して行くことは出來ません。と申しますと皆さんは、それは少々云ひ過ぎだとお考へになるかも知れませんが、今暫く我慢して聞いて下さい。これから、今私の申しました事が正しい所以を說明致しませう。

三二　(一)、先づ私達は文學を輕蔑して來たと申しましたが、國民としての立場から考へて見ますのに、一體如何程の注意を本について拂つてゐるでせうか。馬に費す金額に較べてみて、公立のものであれ、個人のものであれ、圖書室にどれぐらいの金額を費してゐるとお考へになりますか。藏書に惜しげもなく金を費す人があると、皆さんは藏書狂と云ひます。それにも拘らず皆さんは、毎日馬の爲に身代限りをしてゐる人が澤山あるのですが、そんな人を馬狂ひとは云はない。而も、本の爲に身代限りをした人があるとは噂にも聞いたことがありません。卑近な例をとつて申しますと、英國中にある公私の本棚の內容は、英國中の酒倉の中味に較べて見て、どれ位の價がするとお考へになりますか。贅澤な食物

にかける費用と、本にかける費用とを、比較して見たら如何なものでせうか。私達はよく肉體を養ふ食物について話すやうに、精神の糧についても話しますが、良い本の中にはさう云ふ糧が無盡藏に含まれて居ります。良書は生命を養ふ糧であり、人間の中の最も優れた所を養ふ糧であります。それにも不拘大きな鰈を買ふ位の金で良書が買へるのに、買はうか買ふまいかと、隨分長い間躊躇つてゐる人が多いのです。然し中には、一冊の本を買ふために、食べる物も食べず、着る物も着ないと云ふやうな人もありますが、それでさへもその人の藏書は大抵の人の食事の費用より廉いのです。かう云ふ風に苦しい思ひに耐へる人が極めて少ないのは、殘念な事であります。貴重な物は、働いたり節約したりして手に入れた物であれば、一層貴重に思はれるものです。若し公設圖書館が、公の宴會の費用の半分しか掛らなかつたり、書物が腕環の費用の十分の一で買へるものなら、どんな馬鹿な男女でも、宴會で貪り喰つたり、腕環を光らせたりするのと、同じ價値が、本を讀むのにもあるのではないかと思ふかも知れない。又一方では、賢い人達でさへ書物が餘り安い

ので、讀む價値のある本は、買ふ價値があると云ふことを忘れて了うのであります。あまり價値のない書物は全く價値がないと云つてもよろしい。又書物は繰り返して讀み、それに親しみを感ずるやうにならないと、何の役にも立たないものです。そしてまた、丁度兵士が武器庫から必要な武器を取り出したり、主婦が貯藏所から必要な香料を持つて來たりするやうに、讀んだ書物から必要な所を引き出せるやうに印をつけて置くようにしないと役に立ちません。小麥で作つたパンは結構ですが、良い書物の中には、讀み味はつて見ると蜜のやうに甘いパンがあります。

それで若し一生の中に、斯の如く益する所の大きいパン代の勘定書を、拂つたことがない家族があるとしますと、その家族は隨分貧乏なのに違ひありません。私達は自ら富國の民と稱してゐながら、貸本屋から借りた書物に手垢をつけるとは、何と意地汚い馬鹿な國民でせう。

三三　（二）　私は我國民は科學を輕蔑してゐると申しました。すると皆さんは「何んだつて。

我々はあらゆる發見の先鞭をつけてゐるではないか。全世界の人々は我が發明を視て、吃驚したり、面喰つたりしてゐるぢやないか。」とおつしやるでせう。成程さうですが、それにしてもこれは國民的の仕事であるとお考へになるのですか。否、此の仕事は全べて國民には何の關係もなく、個人の努力と費用とでなされたのです。成程、私達は喜んで科學を利用し、科學と云ふ骨についてゐる肉を、ガツ〳〵としやぶり取りますが、科學者が一片の骨とか、パンの屑を私達の所へ貰ひに來るとすると、全く冷淡な態度をとります。國民としての立場から、私達は科學の爲に一體何をしたでせうか。船舶が安全に航海するには、時間を知らなければならないので、天文台の費用を出します。また毎年議會に於てはせがまれた結果澁々大英博物館のために幾らかの豫算を支出しますが、これとても大英博物館が剝製の鳥を保存して置いて、子供達を遊ばせる場所であるから、嫌々ながら認めるのです。誰かゞ自費で望遠鏡を買つて、新らしい星雲でも發見しようものなら、私達は我もの顔に自慢するのです。また一萬人もの獵好きの地主達の一人が、地球は狐の住家とし

て出來てゐるのではない、と云ふことに不圖氣附いて、自ら發掘して、黃金や石炭の在る場所を敎へてくれたとすると、國民は成程大地と云ふものは役に立つものだと思つて、その地主に騎士（ナイト）の位を與へるのです。それも誠に結構なことではありますが、その地主が役に立つ仕事を探し出して、自らそれに從事したからと云つて、別に國民全體の面目になると云ふわけではありません。此れが面目になると考へるなら、他の地主連がそんな發見をしないでゐることも、國民全體の不面目となるわけです。此の漠然とした議論を、お疑ひになるのなら、私達の科學に對する愛が、どれ位のものであるかを示す一つの事實、それは考慮すべき事實でありますが、その事實をお話し致しませう。

二年前にゾーレンホーフエンで發見された化石の蒐集が、バヴアリヤで寶物に出たのですが、それは完全なことに於ては稀な多くの標本を有して居り、殊にその中の一つの標本は、知られてゐない生物が存在してゐたことを證明するだけでも、無類のものであつたのです。此の蒐集は、個人の買手の間の市價は、多分千磅乃至千二百磅位だつたでせうが、

それが英國に七百磅ではどうかと申込んで來たのですが、我が國民はその七百磅を出さうとしなかつたのです。あの場合オーウェン教授が時間を費し、議會に於て五月蠅く縋んでやつと四百磅はその場拂ひとし、殘りの三百磅はオーウェン教授自身が責任を持つやうに許可を得たのでよかつたが、さうでなかつたならば、あの化石は、今頃はミューニッヒの博物館に保存されてゐることでせう。その殘りの三百磅も英國民は何日かは澁々仕拂ふでせうが、まあ當分の間は知らぬ顏をしてゐることでせう。その癖、それが評判にならうものなら、我物顏に自慢するのです。まあ一寸、この事實を數字の上で考へて御覽なさい。國費の歲出は少くとも五千萬磅で、その三分の一は軍事費であります。さて七百磅の五千萬磅に對する割合は、ざつと七片の二千磅に對する割合と同じであります。ですから假りに此處に一人の紳士があつて、その收入は幾らあるかわからないのですが、金持であることは、一年に庭園の垣と召使との經費二千磅を支出してゐることからでも推察出來ます。さてその紳士が自ら科學が好きであると云つておきながら、一人の召使ひがやつて來て、

今迄に知られてゐない生物が存在してゐたことを證明する糸口となる、天下一品の化石があつて、僅か七片で買へると熱心に話した場合に、科學が好きであり、而も庭園に年々二千磅も費す此の紳士が、その召使を二三ヶ月も待たせておいたあげく、「うむ、その化石を買ふのに四片お前にやらう。でも後の三片は來年迄お前の方で立替へておいてくれるのならだよ。」と答へたとしたら如何でせう。

三四　（三）　次に私は皆さんが藝術を輕蔑して來たと申しました。すると皆さんは「何と云ふことだ。我々は延長數哩に及ぶ美術品展覽會を開くではないか。そして一枚の繪に數千磅を投げ出すではないか。美術學校にしても、美術協會にしても、世界中の何れの國よりも澤山あるではないか。」と云はれるでせう。

成程さうですが、これは皆商賣氣でやつてゐることです。繪を賣るにしましても、まるで石炭でも賣るやうにどし〳〵賣りますし、陶器を賣るにしましても、まるで鐵でも賣るやうに喜んで賣ります。出來る事なら他の國民のパンまでも、その口から取り上げたいと

思つてゐるのですが、さうも出來ませんので、ルツドゲイトの小僧のやうに、世界の大通りに立つて、通る人毎に「何か御入用はありませんか。」と金切聲を上げるのを生涯の理想としてゐるのであります。かう云ふ風でありますから、皆さんは自分の才能とか境遇とか云ふものを少しも御存じない。皆さんは、濕つてゐて平坦で肥沃な粘土の上に住んで居りながら、銅色の葡萄園の中に住むフランス人や、噴火山の斷崖の下に住むイタリア人と同じやうに、輕快な美的想像力を持つことが出來ると思つたり、又藝術は簿記のやうに習得することが出來るもので、一度覺えると益々上達するものだと思つてゐられる。皆さんは窓のない壁に貼りつけてあるビラに、少しも注意しないものですが、それと同じやうに、繪畫についても少しも關心をお持ちにならない。壁にビラを見えるやうに貼るのはよいとしても、どうも繪畫を掲げるべき場所ではありません。又皆さんは國内にどんな名畫があるか御存知ないでせう。それが眞物か僞物かも知らず、鄭重に取扱はれてゐるかどうかも御存知ない。また外國に、世界でも屈指の名畫が、がらくたの中に埋れて荒廢に任せ

られてゐるのも見ても別に何とも思はない。早い話が、ベニスのさう云ふ名畫を保存してゐる宮殿に向つて、オーストリアの大砲の砲口が向けられた時も一向平氣でゐたと云ふこともあります。ですから、ヨーロツパ中にある全ての名畫が、明日にでもオーストリアの砲壘で、彈丸除けの袋にされてしまつたとしても、一日の遊獵に獲物が二三羽少ないやうな場合程困らない。我國民の美術愛好心と云ふのも此の程度であると思はれます。

三五　（四）　皆さんは自然を輕蔑してゐると私は申しましたが、此の場合の自然と云ふのは自然の景色の奥深くて神聖な感じのことであります。フランス大革命の時には、フランスでは多くの寺院を厩にしてしまつたことがありますが、我國では大地と云ふ大寺院を競技場にしてしまつたではありませんか。此の寺院にも譬ふべき、大地の廊下に鐵道を敷いて、汽車で乘り廻し、祭壇で飲み食ひするのを無上の樂としてゐる。シャフホーゼンの瀧の上には鐵橋が架けられ、ウイリアム・テルの記念のために立てられた宮の側にあるリユーサン湖の崖には隧道が掘られ、ジエネヴア湖畔のクラレンスの村は潰されてしまひました。

英國中でも、けたゝましい汽笛の聞えない村は一つもなくなり、地面至る所に、石炭殼を踏み入れない所はありません。また皆さんが外國のどの都市へ行かれても、美くしいさびのある街路も、氣持の良い花園も、崩れかゝつた癩病のやうな眞新らしいホテルや、香水を賣る店で汚されてしまつてゐます。また我が國の詩人達が心から愛してゐたアルプスでさへ、まるで熊飼場の滑り棒のやうに思つて、キヤツキヤツと喜しさうな聲を上げて攀ぢ登つたり滑り降りたりされてゐます。ところが嬉しさの餘り聲が出なくなつて、喜びを表はす言葉もなくなると、靜かなアルプスの谷間を火藥の爆音で充たし、自慢で顏を眞赤にし、滿足の果、しやつくりをするやうに饒舌り立てる。深く考へて見て、此の人間社會で最も悲しむべき二つの光景がありますが、その一つと云ふのはヤムニの村で、英國人達が錆びた榴散彈を發射して喜んでゐる光景で、今一つはツーリッヒにゐるスイス人の葡萄作り達が「葡萄畑の番小屋」に三々五々集つて、豐作を神に感謝するために、騎馬拳銃を朝から晩まで發射することであります。

義務と云ふものをハッキリ心得てゐないのは情無いことですが、娯樂に就いて斯の如き考へを持つてゐるのは一層情無いことに思はれます。

三六　最後に皆さんは同情を輕蔑してゐると申しましたが、之に就きましても私が言葉を費すまでもないことゝ思ひます。私がよく切抜いて、抽斗しの中に藏つて置きます、新聞の記事の一つを印刷しておきませう。これは今年（一八六五年）の始めの頃のディリー・テリグラフから切り抜いたものです。（日附はつい記しておくのを忘れましたが、切り抜きの裏面に「昨日、本年度特別法會の第七回目が、セント・ポール寺院で、リボン僧正の手によつて施行された。」と云ふ記事がありますから、探せば譯のないことです。）私が特に印刷に致します記事も、別に珍らしいものでなく、毎日起つてゐる事實なんですが、偶然次に述べますやうな形で檢屍官の目に止まつたのです。（私はこれを赤色で印刷致しませう。かういふ事件は、將來書物の中に切抜きにしてのせる場合には、きつと赤色で印刷してあるに違ひないと思ひます。（原本には次の部分は赤色で印刷してある。）

「マイケル・コリンズ（五十八歳）の死因に關する取り調べが、檢屍官代理リチャーズ氏の手によつて去る金曜日、スピタルフィールドのクライスト、チャーチにある白馬亭にて行はれた。メアリー、コリンズは貧相な婦人であるが證人として次の如くのべた。『死んだ夫と息子と共にクライスト、チャーチのコブス・コート二番地に間借りをしてゐました。死んだ夫は靴直しでありました。私が外から古靴を買込んで來ますと、夫と息子とが修繕し、私はそれを他の店へ賣り込んでゐたのですが、收入はほんの少ししかありませんでした。夫と息子とは日夜働き續けて、そのお金で僅かばかりのパンと茶とを買ひ、一週二志の間代を拂つて一家の生活を保つてをりました。先週の金曜日に、夫は椅子から立上り、身震ひを始めまして、俺はもう駄目だ。俺が死ねば誰か他の者に、これを仕上げて貰はなくちや、と云ひつゝ古靴を投げ出しました。部屋には火の氣がなかつたので、故人は、暖かければ、いくらか好いんだが、と云つてをりました。そこで私は修繕の出來た二足の古靴を店へ賣りに行きましたが、二足で十四片にしかなりませんでした。店の者は、此方で

も儲けなきやならないからね、と云つてをりました。私はその金で石炭十四封度と、お茶とパンを少しばかり買つて來ました。息子は夜通し寢ないで、金を手に入れるために修繕の仕事をつゞけてゐましたが、夫は土曜日の朝死んでしまひました。食物が足りなかつたのです。』――檢屍官は言ふ。『お前達が、貧民救濟所へ入らなかつたのは如何にも殘念だつたね。』證人は言ふ。『でも私達は小さくてもよいから家庭の樂しみを味ひたかつたのです。』部屋の中には隈の方に僅かばかりの藁しかなく、窓は壞れてゐた。それを見て、陪審員は一體何の家庭の樂しみがあるのかと尋ねた。すると證人は泣き出して、言葉をついで『まだ布團もあれば、その他につまらないものが少しはあります。それに夫はどうしても救濟所へは入りたくないと言つてをりました。夏の氣候のよい時には、時としては一週間十志の收入のあることもありまして、さう云ふ時には、次の週は大抵收入のないやうなことがありましたので。何時でもそのために幾らかを貯へておきました。冬は夏の半分の收入もありません。殊に此處三年と云ふものは增々惡くなつて參りました。』

息子のコーネリアス・コリンズは證人として次のやうに述べた。『あつしは、一八四七年からずつと親爺の手傳ひをしてゐるのです。いつでも夜遅くまで仕事をしてゐますので、二人共目が見えなくなることもありました。現にあつしの目は霞がかゝつて了つてをります。五年程前に教區のお寺へ助けて下さいと云つたのですが、救助係の方ではパンを四ポンドくれたゝけで、二度と再びやつて來たら石でも食はせるぞと云ひました。親爺にさう云ひますと、大變腹を立てまして、それからずつとお寺の方とも緣を切つてしまひましたやうなわけで。それからは段々苦しくなつて來まして、先週の金曜日には、ローソクを買ふ半片の金もなくなりました。親爺は藁の上にごろりとなつて、朝まではもつまいと言ひました。』

陪審員は言つた。『お前達も餓死しようとしてゐるのだから、夏までは救濟所へ行かなければならないぞ。』

證人は更に言葉をつゞけて、『救濟所へ入りました所で生きては行けないでせう。と申

しますのは夏になつて出て來ましても、まるで天から降つて來た人間のやうなわけで、誰にもあつし達がわからないでせうし、部屋も貸してくれないでせう。それよりも目もだんゝよくなるでせうから、唯今食ひ物さへありましたら働けるんですが。』

ジイ・ピイ・ウォーカー醫師の言に依れば、『故人は卒倒、即ち食物の缺乏より來る疲勞のために死に至つたものである。寢具もなく、此處四ケ月の間はパン以外には攝取してをらず、そのために身體には少しの脂肪分もない。病氣はないのであるから、醫療を施しさへすれば、卒倒の狀態から恢復したかも知れなかつた。』

檢屍官が此の事件の痛ましい性質について述べた後に、陪審員は次の如き判決を下した。『故人は食糧品及び生活必需品の缺乏と、醫療の助けを得なかつた爲めに、死亡したものである。』

三七 これをお聞きゝになつた皆さんは、「何故母親と息子とは貧民救濟所へ入るのを厭がるのだらう。」と不審に思はれるかも知れない。それはかう云ふわけです。金持にはあ

りませんが、貧乏人は貧民救濟所に對して一種の偏見を持つてゐるやうです。政府から年金を貰つてゐる人は誰れでも、或意味から云へば、大規模に救濟所へ入つてゐるわけになり、さう云ふ人々から考へますと、救濟所と云ふ所は少しも苦しいことはなく、遊び場と呼ばれてもよいものだと云ふことになります。所が貧民達は、人樣の世話にならないで死にたいと望んでゐるらしいのです。

貧民達のために、小綺麗で心持のよい遊び場を作つてやるか、年金を與へて自分の家で暮させて、少しは政府の金を使はせるやうにしますならば、その境遇に滿足するでせう。それは兎も角として、事實はどうすることも出來ないので、私達の救濟の仕方が、貧民達に侮辱と苦痛とを與へて居りますから、救濟されるよりも死んだ方がましだと思つて居るのです。更に又、他の方面から考へますと、教育も受けさせず、愚かな儘で置きますのでまるで獸のやうに、物事もわからず、默つた儘で、どうしたらいゝのか、何を要求したらよいのかも知らないで、餓死してしまうのです。私は、皆さんが同情を輕蔑してゐると申

しましたが、さうでなかつたら、こんな新聞記事は、大道で暗殺が許されないやうに、キリスト教國の新聞にあらう筈はありません。キリスト教の、と私は申しましたが、私達がキリスト教徒でないならば、こんな新聞記事も出ないでせう。私達が前に申しましたやうな罪を犯すに至つたのも、信仰と云ふものに醉ひ痴れて、宗教を芝居じみたものにしてしまつてゐるからだと思ひます。オルガンと廻廊、朝夕の御勤めなどゝ、芝居めいたキリスト教であります。その基督教を茶化して、サタネラスやロバートやファウストの中にある惡魔の芝居と混同し、飾り窓の中で讃美歌を歌ひ、お祈りの眞似事の調子を色々に變へて見て「おゝ神よ。」と云ふ所を藝術的な調子をもつて云つたり致します。そして翌日には第三の天誡の解釋とも思はれるやうな事柄に關する小冊子を、無教育な似而非信者の間に配布いたします。此のガスの光に照され、ガスの光に勵まされた基督教に、私達は得意になつてゐて、それを非難する異教徒の手を袂から振り拂ふのであります。然しながら、普通の基督教の正義を平易な言葉で表し、平易な行ひで示し、キリストの教へを人生の指針

となし、國民の事業とか希望とかを、キリストの教への上に立てると云ふ目的のためには私達の信仰は何の役に立つのでせう。現代の英國の宗教から眞の實行と熱情とを得ることは、香の煙の中から電光を取り出すことが出來ないやうに、不可能なことであります。香の煙もオルガンも兩方とも捨てゝしまつた方がよろしい。そんなものや、ゴシック式の窓や色硝子などは、芝居の道具方にくれてやつた方がよろしい。ガスの光りで姿を現す幽靈などは、健康な一息きで吹消して、その代りに、玄關の所にゐる乞食の世話でもしてやつた方がましです。何故かと申しますと、一人が他人に助けの手を差し出すところにこそ、本當の教會があるのでありまして、今迄におきましても、また今後永久に、さう云ふ教會こそは神聖で、母親のやうな感じのする本當の教會であります。

三八 私は繰り返して申しますが、國民としての立場では、皆さんは、今迄述べて來ましたやうな、快い仕事や美くしい行ひを輕蔑してゐます。もつとも、中には輕蔑してゐない人もありまして、私達がその日を暮して行けるのは、偏へに、さう云ふ人の仕事と、力と

生死とに依つてゐるのであります。それにも拘はらず、さう云ふ人々に少しも感謝しない。只今私達が、輕蔑したり忘れたりして居る人がゐなかつたならば、富を得ることも、樂しみも誇りも得ることが出來ないでせう。犯罪を未然に防ぐために、終夜小暗い小路を彼方此方歩き廻つて、何時なんどき頭を打ち碎かれて、一生の不具となるかも知れない危險に身を曝してゐるにも拘らず、少しも人々から有難がられない警官とか、荒浪と闘ふ水夫とか、研究に餘念のない温和な學生とか、褒られもせず、食物も殆んど食べないで、荷馬車の馬のやうに、希望もなく輕蔑されつゝも、自分の仕事を成し遂げて行く平勞働者等のやうな人々のお蔭で、英國は生きてゐるのであります。然し、それらの人々は國民全體ではありません。國民の胴體であり、神經である人々で、精神の失せてしまつた舊來の習慣の力で、辛棒强く働いてゐるのであります。國民は唯樂しむことを以て願ひとし、目的としてをります。宗教とは教會の諸々の儀式を行ふことであり、自分達が樂しんでゐる間に、群衆を靜かに働かせておくために、催眠劑のやうな眞理（むしろ非眞理と云つた方がよろ

しいが）を敎へこむことをもつて足れりとしてをります。どうしたら樂しく暮せるかと云ふ考へが、理由の解らない、放埒な無慈悲な、熱病のやうに私達につきまとつてをります。

あの「不安」（譯者註これは英語では「病氣」と云ふ意味である）と云ふ言葉、即ち「安定」を否定し、同時に「安定」と云ふ事も、有り得るといふ事を表はす「不安」といふ言葉が、文字通り、英國の産業と娯樂との、道德的方面を何と完全に表現してゐることでせう。

三九　私達が適當な仕事を持つてゐて、働いてゐる時には、樂しみはその中から生れて來るものであります。私達が心から人を助け同情するやうになると、感情もぐらつかなく、深く亦永續きがするやうになり、又精神に力をつけるやうになります。所が現在は、本當の仕事がないのですから、全精力を金儲けと云ふ僞りの仕事に注ぎこんでゐます。本當の感情を持つてゐないので、弄ぶために飾り立てた僞の感情を、持たねばならなくなつてゐます。弄ぶにしましても、子供が玩具を持つて遊ぶやうに、如何にも無邪氣に弄ぶのなら

まだ好いのですが、偶像を崇拜する猶太人が、洞窟の壁に刻んであつて、掘り出して見ないと何だかわからないやうな偶像を弄ぶやうに、如何にも罪深く陰險な弄び方をするのです。

正義を行ふのではなくて、小說や芝居で正義の眞似事をするのです。破壞してしまつた自然の景色の代りに、無言劇の變化のある舞台を作りあげたのです。人間の天性は、何等かの畏敬の念とか悲しみとかを味はなくては、やつて行けないものですから、當然同胞と分け合はねばならない悲しみとか、又當然同胞と共に流さねばならない淸い涙の代りに、輕罪裁判所での悲しい出來事を、氣味よげに眺めたり、墓場で夜露を集めたりするやうな、人世の暗黑面に許り興味を持つてゐるのであります。

四〇　こう云ふ事の本當の意味を知るのは困難ではありますが、事實は恐るべきものであります。然し、その中に含まれてゐる國民の過失は、始めに考へられる程、大きなものではないかも知れません。私達は、日に日に數千人の人が殺されるのを默視したり、その死

因を作つたりはしてゐますが、元々惡意があるわけではありません。又家を燒いたり、農夫の畑を荒したりは致しますが、さて人に危害を加へたことがわかりますと氣の毒に思ふ。まだまだ心の中では親切であり、德を行ことも出來るのですが、その程度たるや、子供と同じであります。シャーマーズ〔一七八〇年――一八四七年、スコットランドの僧侶〕は晩年に於ても、世間に對して可成りの勢力を持つてをりましたが、輿論と云ふことについて、或事件で大いに困つた目に遭つたことがありますので、次のやうな嘆息をもらしました。「世間は丁度大きな赤ん坊のやうなものだ。」

却說、こう云う思想上の重大な事柄を、讀書の方法の研究と、ごつちやまぜにして話しましたのは、何故かと申しますと、國民の過失とか不幸とかをよく見れば見る程、過失も不幸も、元はと云へば國民がまるで子供のやうに無智であり、普通の事柄を考へる時にも、教育が足りないと云ふことに起因してゐると思はれるからであります。繰り返して申しますが、嘆かねばならないのは、國民の惡德とか、利己主義とか、愚鈍と云ふことではなく

て子供のやうな手に負へない、無鐵砲さなのであります。唯本當の子供と違ふ所は、先生を認めないのでありますから、到底導いて行くことが出來ないと云ふことであります。

四一　最近の我國の偉大な畫家ターナーの、美くしいが餘りに顧みられない作品の中に、私達英國人の奇妙な性質が畫かれてゐます。それはカークビイ・ロンスデイルの墓地の繪で、小川と谷と丘があり、その向ふには大空が折り重つてゐます。この景色にも、墓の下に葬られてゐる人々にも無頓着に、一團の子供達が、墓石の上に小さい書物を置いて、それに石を投げつけて落さうとしてゐる所が畫いてあります。丁度これと同じ樣に、私達も、私達の敎へとなる死人の言葉を弄び、粗暴で無鐵胞な我儘から、その言葉を退けて了つてゐます。死者の世界の大理石の門を開けて、眠つてゐる王侯の所へ紛ぎれ込み、衣服に指を觸れ、頭上の王冠を搖り動かすやうな事があつても、塵にまみれた肖像畫のやうに、まるつきり默つてゐるのですが、それと云ふのも、眠れる王侯達を呼び覺す呪文を知らないからなのです。

その呪文を知つてゐて、唱へでも致しますと、王侯達はハット目を覺して、此の世に在つた頃の、威嚴を示して起き上り、ぢつと私達を見詰めて、依然として彳らず、依然として搖ぎなき王冠を戴いて、次の樣に言ふでせう。「汝も亦我々の如く心純潔に强固になりしや、汝も亦我々の仲間なりや。」と。これは丁度、地獄に落ちた諸王が、新たに落ちて來た者に向つて、「汝も亦我々の如く弱き者となりしや、汝も亦我々の仲間なりや。」と云ふのと好く似てゐると思はれます。

四二　力强き感情と力强き理智こそは「寛容」と呼ばれますが、「寛容」であることが即ち人生に於て偉大となつたことでありまして、私達が寛容になればなる程益々「出世」したとも云へるのです。「出世」と云つても本當の人生に於てでありまして、人生の外にある裝飾に於てではありません。皆さんは、一家の主が死んだ時に、シシア人の間に行はれる習慣〔ヘロドタス第四章第七十三節參照〕を御存知ですか。その習慣と云ふのは、一家の主人が死んだ時には、晴衣を着せられて、車に乘せられ、友達の家から家へと運び廻さ

れる。友達は死骸を正座に据えて、その前で酒宴を開くのです。そこで、自分ではまだ生きてゐると思つてゐる間に、此のシシア人の名譽を段々受けて行かねばならないのだと、あからさまに皆さんに告げたとしたら如何でせう。又事實さうなのですが。即ち次のやうに申しまたなら如何でせうか。「お前達は徐々に死んで行くのだ。お前達の血は日に日に冷くなり、肉は硬くなり、心臟は遂には錆びた鐵の瓣のやうに鼓動しなくなるのだ。生命は身体から消え失せて行き、地面を通つてカイナの氷〔ダンテの地獄篇中に在る〕の中に沈んで行くのだ。然し又、日に日にお前達の身体は、益々美しく裝はれ、高き車に納められ、望むがまゝに胸に勳章、頭に王冠を飾ることが出來る。人々はその前に額づき、それを見つめて叫び聲を上げ、通りをあちらこちらへと、その後につき從ふ。それが爲に宮を築き、食卓の正座に据えて夜もすがら酒宴を張るのだ。するとその魂は、人々のなすことを知り、兩肩に黃金の衣の重さを感じ、頭に王冠の緣の皺を感ずるのであるが——ただそれだけだ。」皆さんは、死の天使が口づから傳へる、此の樣な申出を承諾いたしますか。

最も卑しい人でも、承諾する人はありますまい。所が、事實上では、人々は或程度まで、それに飛びついて行くのであります。私達の多くは恐ろしさの餘りそれに飛びついて行くのです。人生の何であるかを知らないで出世したいと望む者、少しでも多く馬や召使や財産を增し、少しでも多く名譽を得たいと望むのみで、自らの魂の向上を計らない者は、誰でも此の申出を承諾するのです。感情が次第に軟くなり、血液が暖くなり、頭腦の働きが鋭敏になり、精神的に、人生と平和とに心するやうになる人こそは、人生に於て立身出世をするのである。かふいふ生命を持つてゐる人こそ、本當の地上の君主であります。その他の王位は、それが本當のものである場合には、前述のものの單なる結果であり、現れであるに過ぎないのです。この資格を缺けば、その王位たるや芝居の上の王位であり、寶石を以て飾られた高價な見せ物でありまして、いくら高價でも、結局は國民の玩具に過ぎないのであります。又は、全然王位ではなくて、暴君であるか、それとも、國民全體の愚行の實際の現れに過ぎません。故に私は以前にも申しました。

「現に在る政府とは、或る國民とにとつては玩具であり、或る國民にとつては疾病であり亦或る國民にとつては束縛であり、その他の多くの國民にとつては重荷である。」と。

四三 國民は君主自身の個人的所有物であるので、賣買をすることも出來、羊を手に入れるやうに手に入れて、その肉を食ひ、その羊毛を刈り取ることも出來るのであり、あのアキリーズが腹立ちまぎれに、卑しい君主達に與へた言葉、「國民を食ひものにする」とは、全ての君主達について言へる形容の言葉とでも云ふやうに、思慮に富んだ人達でさへ、王たるの資格について話すのを聞くのですが、これには、あきれて物も言へません。その人達は、王領を增すことを、個人の地所を增すのと、まるで同じことのやうに言ひます。

こんな考へを持つてゐる君主は、如何に强くとも、國民の本當の君主である筈はありません。それは丁度虻が馬の君主でないのと同じことであります。虻は馬の血を吸つて暴れさせはしますが、馬を導いて行くことは出來ません。さういふ君主と、宮廷と、軍隊とはよくよく見れば、夏の空氣中に、吻を揃へ、調子のよいラッパを鳴らして飛びまわつてゐ

る、一群の蚊のやうなものに過ぎません。黄昏は美しい事もあらうが、霞のやうに群り光る蚊がゐる以上は、さう健康によいとは云へません。本當の君主は、苟しくも治めるからには、靜かに治めますが、元來政治をとることを厭つてゐるのであります。大抵の君主は唯「拒絶權」を使ふだけですが、若しさうでなければ、君主が役に立ちさうだと思ふや否や、暴民供は、君主の「拒絶權」を自分達の方から使用するやうになります。

四四 然し現在眼前にある君主と雖も、その領土を地理上の境界線で測るのではなく、その國力で測るやうになれば、本當の君主となることが出來ると思ひます。

トレント河が少しばかり自領を切り取つてゐるとか、ライン河が少しばかり領地を削つてゐるとか云ふことは、大した問題ではない。然し、人民に向つて「行け。」と云へば行き、「來れ。」と云へば來るやうになることこそ、大切なことであります。トレント河の流れの向きを變ずることが出來るやうに、人民を思ふがまゝに左右することが、出來ることが、君主たるものに必要なことであります。

人民が君主を憎み、殺傷の憂目を見てゐるか、それとも君主を愛し、それがため生存を續けてゐるか、これを知ることが大切であります。要するに距離によつて測るのではなく人民によつて領土を計ること、人民の君主に對する、愛情の深さを計ることが必要であります。

四五 測ると申しましたが、測ることは出來ません。實行し、敎へ、天國に於ても、地上の王國に於ても、最も優れてゐる人々と、高々蟲魚や錆の力位しかないやうな無爲徒食の輩との、違ひを誰が測ることが出來ませうか。

蟲魚の如き君主は、蟲魚の如き人民のために、その財寶を貯へ、錆の如き君主は、その力たるや、錆が武器に對する力のやうなものでありますが、錆のやうな人民の爲にその財寶を貯へ、盜人のやうな君主は、盜人のやうな人民のために、財を殘すものですが、番人をつける必要もなく、盜人が多くなればなる程、益々その價値を高めて行く財寶を貯へた君主が、殆んどないのは、一寸不思議な氣がします。錦繡は貯へても裂けるし、兜や劍は

錆びるし、寶石は四散して了ひますが、今迄には、此の三種のものを貯へた三種の君主達はあります。所で、人の顧みない古い書物の中で、寶石も黄金も及ばず、純金を以つてしてもその價値を計ることの出來ないやうな財のあることを讀んだ君主があつたとしたら如何でせう。此の寶こそは、アテナの神の梭にて織られた、美しい織物であり、バルカンの神の聖火で鍛えた武器であり、デルフィンの彼方、太陽の沈む所にて、太陽の赤き心臓の中より掘り出された黄金であります。深く繪を織り込んだ織物、貫き難き武器、飲むことの出來る黄金であります。私達に呼びかけ、戸口の柱の所で待ち受け、翼を附せられた力で私達を導き、誤ることなき眼にて、梟も知らず、兀鷹も見ざる路を通つて、私達を導いて行つてくれる行動の天使、勤勞の天使、思想の天使であります。此れを聞き、國民のために、今まで顧みられなかつた財、即ち知慧と云ふ財を貯へる君主があつたとしたら如何でせうか。

四六　さうすれば、どんなに驚くべきことになるでせう。現在の國民の知識では考へも及

ばないことです。百姓達に、銃劍術の代りに讀書法を習はせ、殺人者の軍隊ではなくて思想家の軍隊を、給料を拂ひ、優れた統率を以つて組織し訓練し維持し、國民全體が射的場と同じく、讀書室にも興味を持つやうになり、的に鉛の彈丸を命中させた時と同じやうに、事實を探し當た者にも賞品を與へると云ふ風にすれば如何でせう。然し、文明國の資本家達が戰爭を支持しないで、文藝を支持するなどゝ云ふことは、口では立派に言へますが、迚も實行などは出來さうにもありません。

四七　私が書きました色々の書物の中でも、これこそ本當の本であつて、確信を以つて書き、永久に殘ると思はれるものが一冊あります。その中の文章を讀んで見ますから、暫く御辛棒を願ひます。

「不正なる戰爭を支持して行くものは、全く資本家の富であるといふ事は、歐洲に於ける富の運用の恐るべき一形式である。正義の戰爭は、これを支持して行くのに、斯くの如く多額の金を必要としない。正義の戰爭をなすものは、金を貰はないでやる。然るに不正な

る戰爭をなすには、人間の精神と肉體とを買はねばならない。また優秀なる武器をも買はねばならない。これがために戰爭は極度に金のかゝる仕事になる。一時間の心の平和を買ふだけの、優しい心と正直さとを持ちあわせない、國民と國民との間の卑しい恐怖や腹立たしい疑ひのために、費す費用は言ふ迄もないことである。只今英佛兩國が、お互から年々恐慌を一千萬づゝ買つてゐるやうに、眞理ではなくて、貪慾を敎へる現代の經濟學者の所謂「科學」に依つて、播かれ刈られ倉に收められた、半は荊棘、半は白楊の葉の如き、貧弱なる收穫である。凡ての不正なる戰爭は、敵から掠奪した物か、でなければ、資本家からの借金で支持して行くのである。その借金は、その後の國民の稅金で支拂はれる。國民は何等戰爭の意志はなく、資本家が戰爭の種を播くのである。然し戰爭の實際の根源は國民全體の貪慾にある。貪慾は國民の信仰を奪ひ、正直を無くし、正義を失はしめる。そして遂には、國民各自が損失と刑罰とを受けるに至る。」

四八 フランスとイギリスとは、文字通りお互から恐慌を買つてゐるではありませんか。

お互に一千萬磅も出して、恐怖を買つてゐるではありませんか。こんな風に、毎年一千萬磅も出して恐慌を買ふ代りに、お互に仲良くして、同じ一千萬磅で知識を買ふことにしたら如何でせう。兩國共に、その一千萬磅で、王立の圖書館や美術館や公園や休息所を造ることにしたら如何でせうか。これは英佛兩國にとつて、仲々好い事であるに違ひありません。

四九 然し、此の實現には相當の歲月を要する事でせう。兎も角も、大都市と云ふ大都市には、王立又は國立の、立派な叢書を備へた圖書館が造られると好いと思ひます。そして、各圖書館とも同じ叢書を備へ、その叢書たるや、凡ゆる事柄に關する最も良い本で、出來るだけの方法を盡して、國民の叢書として嚴選されたものであらねばなりません。どの本も、同じ大きさの紙面に印刷してあつて、緣が廣く、氣持の好い分冊になつてゐて、製本をする人々の手本になるやうに、輕くて美しくて、丈夫で完全なものであることが必要です。然かも此等の大圖書館へ淸潔で靜肅な人々は、晝夜を問はず、入ることが出來るのです

此の清潔と靜肅とは、嚴重な法則を設けて守らせるのです。

五〇 皆さんのために、美術館や博物館や、其他多くの貴重な、必要な物の爲に、計畫を立てゝ見たいと思ひますが、今の本についての計畫は、容易に出來るもので、必要なものであります。これが出來ると、英吉利と云ふものに強い强壯劑となると思ひます。何しろ英吉利は只今の所、水腫病に罹り、惡性の飢渴を覺え、もつと榮養を必要としてゐるのでありますから。國民の力に依て穀物條令は廢止されました。さて皆さん、もつと好い食物に就いての穀物條令を、國民の力で作ることが出來ないかどうか努力して見ようぢやありませんか。その食物とは、遠き昔の魔力に包まれた亞剌比亞の穀物の胡麻にて作られた食物であります。盜賊の寶庫ではなくて、王樣達の寶庫を開くと云ふ胡麻で作られた食物であります。

（完）

卷末小記

一、昭和九年度に於いて當讀物調査部は、「讀書」に就いての正しい方針を、確立したいとの念願から、その一資料として、あまねく先達の讀書に關する文獻を蒐集することにした。

二、此の「讀書論」は、その集まれるものの中より調査研究の上、特に三篇を編輯して一卷としたものである。

三、「文學に關する讀書について」は第一書房版小泉八雲全集より、「讀書及書籍」は岩波文庫版ケーベル博士隨筆集より、それぞれ御了解を得た上轉載したものである。猶、「胡麻」の一篇はKenbunsha 版「Sesame and Lilies」より、今回新に飜譯執筆したものである。

四、別に「ヘルン」「ケーベル」「ラスキン」の小傳等をも載せやうかと思つたのであるが、今はそれら一切を省くことにした。

五、「讀み物」の考察や指導の上に幾分なりとも參考になれば幸甚である。

昭和十年一月三十一日

信濃教育會下伊那部會
讀物調査委員記

314

昭和十年三月十五日　印刷
昭和十年三月十七日　發行

長野縣下伊那郡飯田町二八八番地
發行人　信濃教育會下伊那部會
代表者　兩角喜重

長野縣下伊那郡上飯田町四五五六番地
印刷人　原田增藏

長野縣下伊那郡上飯田町四五六三ノ三番地
印刷所　研究社

發行所　信濃教育會下伊那部會

（代田製本）

357
329

終